



Ⅲ 教育協力体験を生かした 国際理解教育の実践

～帰国隊員等の国際理解教育実践の実際～



帰国から長野県教員等ネットワークの立ち上げまで

長野県須坂園芸高等学校 北原 三代志

1. 帰国して…

(1) 派遣にあたっての想い

私は現職教員参加特別制度の2期生として、2003年7月から2005年3月まで、バングラデシュ人民共和国、国立ラッシャヒ体育大学において体育教員の養成に協力した。

JICA 駒ヶ根での訓練中から、現地で活動する約2年の間に何を学び、帰国後はどのような実践ができるだろうと考えていた。また帰国直前にはどのようにしてバングラデシュの文化や習慣、また開発途上国の現状や問題を紹介しようかと思いを巡らせていたものだった。なぜなら我々現職教員の派遣の目的は、任国での協力活動と、帰国後に学校現場や地域において我々の体験を還元することという大きく2つだったからである。

(2) 帰国、転勤…そして忙しい学校現場

2005年3月末にバングラデシュから帰国し、同4月1日より長野県須坂園芸高等学校に転勤となった。

帰国したばかりの当時、慣れない職場の中、まだ私の頭の中は外国のまま。しかも2年前とはかなり教育現場の状況が変わっていた。勤務時間の制約が厳しくなったり、出張等各手続きのオンライン化、高校再編問題、さらに学力、いじめや授業未履修問題、部活動の他、やらなければならない仕事は山積して、とてもバングラデシュのことを振り返っている余裕などなかった。また同僚も同じく仕事に追われるので、私の経験に関心を示すこともなかった。

それでもしばらくすると、私の経歴を聞きつけた近くの短期大学や小学校、地域のボランティア団体などから講演の依頼を受けた。私はこれを機に記憶が新しいうちと思い、暇を見つけてはいくつかのテーマでまとめ始めた。

人権平和、環境破壊、貧困、紛争、食糧問題、感染症、ジェンダーなどの国際的な問題からバングラデシュの宗教、生活習慣、食文化、民族衣装、伝統芸術まで伝えたい内容はたくさんあった。

(3) メッセンジャーとして

ある小学校の放課後教室ではベンガル語を教えるとその珍しい文字に大騒ぎとなり、子供たちは自分の名前をベンガル語で書いて「お母さんに見せるんだ」と家に持ち帰った。また短期大学では女子学生がジェンダーについて関心を示し、イスラム社会での弱い女性の立場やリプロダクティブ・ヘルスについて一時間近く意見を

交換した。いずれも目を輝かせて私の話を聞いてくれる姿を見て、これからもメッセンジャーとしていろいろな形で活動を続けていかなければいけないと感じた。

2. 長野県教員等ネットワーク立ち上げの背景

(1) H18年1月28日 帰国報告会そして長野県教員等ネットワークの立ち上げ

この日は私を含めた現職参加教員の帰国報告会が行われた。最後に皆で車座となり、JICA 駒ヶ根の加藤高史所長（当時）より参加者に対して「今後は皆さんがネットワークを作り、教育現場の様々な問題に対応してほしい」という話があった。



●加藤高史駒ヶ根訓練所長よりネットワークの立ち上げの提案
(毎日新聞社 城島徹氏提供)

その背景として…

「H17年度初め、当時の長野県教育委員会義務教育課長より次のような内容でJICA 駒ヶ根の所長に要請があった。『急増する外国籍の子どもたちへの教育問題は非常に大きなものになっているが、それに対応できる人材が教育現場には少ない。そのために途上国で協力活動を展開してきた協力隊OB・OGで、長野県教職員となっている方々の活用を県としてぜひお願いしたい。』というものだった。

また同じ時期にJICA 駒ヶ根訓練所内でも、帰国している教員、日本人学校で海外の経験のある教員、さらに国際理解教育等に熱心な方等のノウハウや活動を個々のものとしてしまっておくのではなく、長野県教育の財産として共有していく方法はないものかと考えていたという。

そして学校現場では総合的な学習の時間が割り当てられ、特に国際理解教育に関しては、その授業展開や教材集めに苦勞している先生方からの声を聞いていて、我々も何とかその声に答えたいと思っていた。」

皆この提案に賛成し、私を含め数人が運営員としてこのプロジェクトに関わることになった。このように様々な方面からのニーズがよいタイミングで重なり、「長野県教員等ネットワーク・プロジェクト」が立ち上がったのである。

(詳細は「教育ジャーナル 2008 2月号」にて)

(2) メーリングリストの活用

まず、最初の問題はどのようにして情報交換をしていったらいいかということだった。そして簡単で手取り早い方法がメーリングリストだった。立ち上げを決めたその日に参加希望者からメールアドレスを集め、なんとか情報の交換は可能になった。

しかし、我々だけではなく多くの教育関係者の方に知っていただき、教材や情報を共有したいという当初の希望からは満足のできるものではなかった。

(3) HP「世界に飛び出せ信州っ子～長野県教員等ネットワーク～」

そしてH19年5月、念願叶ってできたのがこのHPだ。今のところHPに関わる費用や管理はJICA 駒ヶ根で行ってもらっている。

<http://kyoinnet-nagano.jica.go.jp/index.html>

「お知らせ」、「国際理解教育実践報告」、「各国教育事情」等が掲載されているが、まだまだ課題は多く、授業に活用したり、教材を共有するところまではまだ時間がかかりそうだ。これから先さらに内容を充実させていきたいと考えている。

3. 「長野県教員等ネットワーク」の主な活動について

(1) 参加者と活動の内容

現在の参加者は約50名、運営委員は以下の5名である。

●青年海外協力隊現職参加（義務教育）

中山晴美 OG（カンボジア／体育／小諸市立美南ガ丘小学校教諭）

藤田昌美 OG（ウズベキスタン／青少年活動／長野市立鬼無里中学校教諭）

●青年海外協力隊現職参加（高校教育）

北原三代志 OB（バングラデシュ／体育／長野県須坂園芸高等学校教諭）

駒村英明 OB（エクアドル／環境教育／長野県塩尻志学館高等学校教諭）

●一般教員参加者代表

西澤 浩（メキシコ日本人学校勤務経験有／中条村立中条小学校教諭）

運営委員が中心となり、次のような活動を行っている。長野県国際協力推進協会の推進員を務める小林論子さん（ガーナ／青少年活動）、JICA 駒ヶ根訓練所とは常にコミュニケーションをとり、協力をいただいている。さらに運営委員個々の活動もとてもエネルギーである。

●運営委員会の開催（適時） - P.71 写真参照。

●講演会、セミナー、ワークショップの企画・運営 - P.71 写真参照

●「長野県教員等ネットワーク」として、各団体への講演会イベントなどへの参加 - P.71 写真参照

●HPの運営

●メーリングリストでの情報共有

●参加者の拡大

●長野県で将来、教員になりたいと考えているJICA ボランティア経験者の育成

(2) 最近のおもな活動について

① 2007年5月21日「H19年度第一回長野県教員等ネットワークによる教員セミナー」



●運営委員でHPの内容について検討



●駒村英明先生(16-1 エクアドル)の環境問題について行った模擬授業

② 2007年10月27～28日 ワールド・コラボ・フェスタ(久屋大通公園)にブースを出展。

文部科学省とのタイアップで現職教員特別参加制度について理解してもらった。〔駒村英明先生(16-1 エクアドル)、笹井亮子先生(11-1 スリランカ)が参加〕

③ 2008年1月27日

「H19年度第二回長野県教員等ネットワークによる教員セミナー」

④ 2008年1月26日 日本体育学会長野支部(信州大学教育学部にて)

「バンラデシュの体育教育事情について」と題して、現地の体育大学や一般の学校の授業の様子、

●筆者



教育課程等につい

て発表した。他の方々とは異なり、研究発表ではなかったのでその場での発表がふさわしいものなのかと思ったが、「初心者へのアプローチ(練習方法や教材づくり)だったら聞いてくれ」「ぜひ留学生を受け入れたいのだが、バンラデシュの学生を紹介してもらえないか」など大学の先生方から声を掛けていただき、やはりアピールしていくということは大切だと実感した。



●中山晴美先生(14-1 カンボジア)のアフリカを題材にした授業実践

⑤2008年2月3日 市民イベント（小学生対象）における出前講座

子供向け出前講座を行い、バングラデシュの生活や言葉を学んだ。自分の名前をベンガル語で書いてみたり、お昼にはバングラカレーを食べてみたり。〔小林論子（16-1 ガーナ）、村田友紀（11-1 フィジー）の協力を得て。〕



●市民イベントの出前講座 一中央筆者一

（3）今後の課題や実施していきたいこと

- HP の内容を充実させ、長野県内の実践を全国的に広げていきたい。
- ネットワークが長野県内にとどまることなく、他県のネットワークと交流しながらお互いに持っているノウハウを紹介できる場を設けていきたい。
- 参加者のデータベース化などで、各学校や他団体（県教委、高教祖、県教組、長野県国際課など）にも活用してもらえるような策を考える。
- 我々の語学力を生かし、外国籍の児童生徒・保護者の中で言葉や学習に困っている方（特にポルトガル語）への支援。
- 県内の日本人、外国人の理解・共生が進むようなイベントの継続的な実施。

特に現在、県内の小中学校で問題になっていることは、外国籍児童が増え、その保護者と教員との間でコミュニケーションがうまくいかないこと。また意志疎通がうまくできない、習慣の違いなどからいじめにあたり、不登校になる子どもも多いと聞いている。当然学力にも問題が生じる。

我々の持つ語学力を生かして、何とか間にはいつて支援できないものかと考えている。まずはできることを一つひとつ実践していきたい。

4. 筆者の実践報告—文化祭での発表例—

（1）担任になって…1学年「世界の人々に感謝～今、私たちにできること～」

帰国して翌年、2006年から学級担任を受け持つことになり、生徒たちと関わるなかで、自分のバングラデシュでの経験を何とか学習の場に生かせないものかと考えた。

高等学校で、しかも私は体育の教員なのでこういった内容を自分の授業で取り扱うことはなかなかできない。そこで毎年10月に行われる文化祭を利用し、クラス展の発表という形で学習を進めることにした。

2006年の文化祭では「世界の人々に感謝～今、私たちにできること～」というテーマに決まった。保健の授業で生徒たちに、開発途上国といわれている国の国名を聞いてみたところ、世界の約8割が開発途上国であるにもかかわらず、生徒たちはその国名がなかなか答えられない。

まずは世界を見渡すことが大切だと思い、開発途上国の現状や問題になっている



●きれいに洗ったスニーカーをラオスに送る

ことを知り、そんな人たちのために自分たちに何ができるかを考え発表した。結果は最優秀企画賞をいただいたほど好評で、生徒たちも満足できたようだった。

「～今、私たちにできること～」として、ABN(長野朝日放送)主催の「スニーカーキャンペーン」に参加して、170足のスニーカーをラオスに送った。

(2) JICA 駒ヶ根・教員ネットワークとの連携

① 2学年「Bangladeshを着よう！食べよう！買いましょう！」

2年生になった2007年の文化祭では「Bangladeshを着よう！食べよう！買いましょう！」と題して、Bangladeshに絞ってこの取り組みを行った。

生徒たちがBangladeshの文化を体験しながら異国を知り、この国の良さや問題点、さらには開発途上国と日本との関係まで考えてくれればと思った。

まずはこの国を知ることから始めた。文化祭に来てくださるお客さんの質問に答えられなければならないため、位置、国土面積、人口、宗教、歴史、気候、言語など基本データについて学習した。さらにJICA 駒ヶ根の方やネットワークの先生方から協力得ながら学習を進めていった。



●夏休みにJICA 駒ヶ根訓練所に向き、BangladeshのNPOで仕事をされていたスタッフに現地のお話を聞く。



●候補生の皆さんとの昼食任国での抱負を聞いたり、サリーの着方を学んだり。

② 「着よう！」は民族衣装に関する学習。

南アジアの多くの国で着られているサリーはわずかつづではあるが、その着方や織り方、染め方などが違う。

夏休みに生徒たちとJICA 駒ヶ根訓練所に行き、施設見学やBangladeshのNGOで働いていた方の体験談をお聞きするとともに、スリランカOGの方にサリーの着方を指導していただいた。

サリーは女子に限定されてしまったが、女生徒たちはその明るい色遣いと一枚布が作り出す美しいシルエットに大満足で、文化祭当日は「試着コーナー」もつくられ、他の人に着せてあげられるほどサリーに馴染んでくれた。



●文化祭当日 サリーを着た我がクラスの美女たち



●着付け指導（笹井亮子先生（11-1 スリランカ））

③「食べよう！」では食文化について。

東はタイから西はパキスタンあたりまで食べられている「CURRY」について学習した。バングラデシュはもともとインドの一部だったので、主食は米、そしておかずは「CURRY」だ。ハウスやS & Bのカレーしか食べたことのない生徒たちにとって、20種類以上の香辛料を使って作るCURRYの味はまさに外国文化。バングラデシュから持ち帰ったスパイスと肉以外の食材は我が高校で取れたものを使い、作り方と香辛料の種類を学んだ。2日間の試食会は大好評で100食分がわずか30分ほどで終了となった。

④「買しましょう！」ではフェアトレードについての学習。

フェアトレードは開発途上国の原料や製品を適正な価格で継続的に購入することを通じ、立場の弱い途上国の生産者や労働者の生活改善と自立を目指している。



バングラデシュに限らず開発途上国には経済的な理由で学校に行けず、文字の読み書きができない人や家の外で働くことのできない女性が多い。そんな人々が作った手工芸品の販売に協力した。生徒たちはフェアトレードの精神と伝統的な織物や刺繍、生産者の暮らし、社会状況などを学ぶことができた。

今回、1972年に設立された民間海外協力団体（NGO）「シャプラニール」を通して委託されたバングラデシュの手工芸品を販売するという形をとり、売上金を生産者に還元した。

⑤文化祭を終えて

この企画も JICA 駒ヶ根や教員ネットの先生方の協力を得られたからこそできたものである。

いろいろな方から動機付けをしてもらった生徒たちは意欲的に動いてくれた。そして「何か人の役に立つことをしたい。」「新しい体験が面白い。」「知らないことを教えてほしい。」など普段余り気づかなかった高校生の純粋な心を見た感じがした。そして行ったことのないバングラデシュという国にとっても興味を持ってくれた。

この経験が将来、生徒たちの国際協力や世界に目を向けるきっかけになってくれれば嬉しい。

5. 最後に…

「平成 19 年度文部科学省・筑波大学国際教育協力シンポジウム」では帰国された先生方の活躍や国際理解教育を实践されている多くの先生のお話を聞くことができ、大変有意義な時間であった。

ただ、我々と同じように自分の経験を何とか子どもたちに伝えたいという思いはあっても、学校の中で時間を見つけだすことが大変であったり、一人で苦勞をされているという先生のお話を聞くと、同じ立場として何か力になりたいと感じた。

この「長野県教員等ネットワーク」が長野県内にとどまらず、全国と繋がり、お互いに協力しあえる体制ができればどんなに素晴らしいことかと思う。

98年冬季オリンピック時に、長野市内の小中学校において、一つの学校が一つの国を応援する「一校一国運動」が行われ、現在でもその交流が続いている。ある意味、全国の中でも国際交流の先進県であるといえる。しかし、その一方で長野県内に増え続ける外国籍児童への対応やいじめ問題。その保護者との言葉や習慣などからコミュニケーションがうまくいかずに苦勞する教員。さらにそういったことがお互いに理解できないためにおこってしまう偏見やすれ違い。現在、社会や学校現場では様々な問題がおきている。

先日、十数年来長野県に住むある外国籍の方から「日本人は冷たい」といわれた。私がバングラデシュにいたころ、現地の方々に大変お世話になったことを考えるとこの言葉はショックだった。我々がちょっとした言葉掛けや気遣いができないからなのか、知らずに持つ偏見の目が彼らにとっては冷たく感じられるのか。

これからは「交流」だけにとどまらず、お互いを理解し共に生きる「共生」へと、もう一歩踏み出す必要があると思う。我々協力隊 OB・OG が、そして長野県教員等ネットワークがこの問題の架け橋になれば素晴らしいと思っている。

長野県教員等ネットワークの設立と JICA 駒ヶ根の連携

元 JICA 駒ヶ根青年海外協力隊訓練所 西山 真由子※

1. 実践の前提について

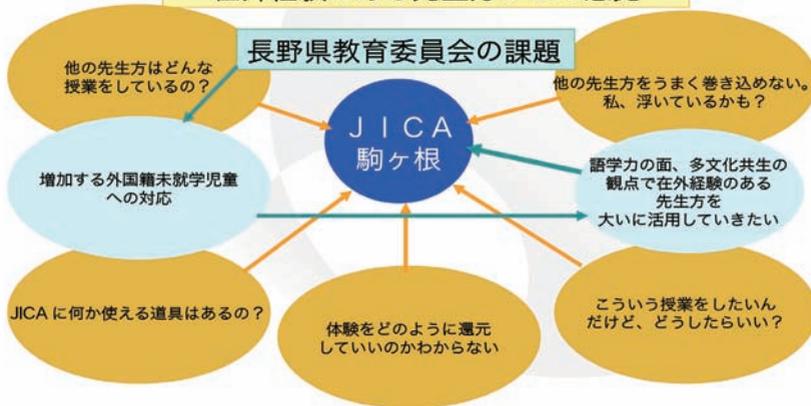
(1) 自らの国際理解教育の経験

大学卒業後、長野県内の学校で4年間勤務し、平成11年度から2年間、青年海外協力隊員としてスリランカに派遣され、孤児院や老人ホーム、養護施設で活動してきた。帰国後は長野県駒ヶ根市にあるJICA駒ヶ根で勤務し、平成16年1月からJICA国際協力推進員として3年間、長野県庁で勤務した。この時期に長野県内の国際理解教育に熱心な先生方と交流する機会が非常に多く、たくさんの先生方と関わるようになった。一方で、長野県内で国際理解教育を推進していくためには「何か」が必要だと感じるようになった。

(2) 「長野県教員等ネットワーク」立ち上げに至る経緯

JICA 長野県教員等ネットワークができるまで

在外経験のある先生方からの意見



※：筆者は平成19年12月までJICA駒ヶ根青年海外協力隊訓練所に勤務し、長野県教員等ネットワーク設立・運営を担当した。

①悩める青年海外協力隊現職参加教員、国際理解教育を進めていく先生方

青年海外協力隊員としてスリランカに派遣されている時から、現職参加されている多くの先生方との関わりがあり、さらに帰国後 JICA 駒ヶ根で勤務していることでさらに関係を深めることとなった。帰国された現職参加教員はすぐに現場復帰し、通常の授業と平行して青年海外協力隊員として体験してきたことを教育現場に還元していかななくてはならない。どういった教材を使っていくと有効なのか、同僚の教員をどのように巻き込んでいったらいいのか…比較的多くの学校で出前講座の依頼を受けて出かける機会が多かった私のところに、様々な悩みを訴えてくる先生方が想像以上にたくさんいらした。また JICA 教師海外研修に参加された先生方は、短い研修期間で入手した教材を還元していく中で、どうしても JICA と連携していきたい、多くの青年海外協力隊 OB・OG の力をお借りしたいという意見が多く聞かれるようになった。研修などで JICA 駒ヶ根を訪れる先生方の中からも、自分たちだけでこのような研修を受けるのはもったいない、もっと多くの先生方に JICA 駒ヶ根の存在を知ってもらわなければならないという意見も聞かれるようになってきた。

② JICA 駒ヶ根としての「国際理解教育」の考え

JICA 全体として、青年海外協力隊等の JICA ボランティア派遣は、ボランティア活動そのものにとどまらず帰国後その体験を還元することによって国民が主体的に途上国について考えることができるようになるよう情報を提供することも大きな意義となっている。JICA 駒ヶ根ではこの意義を現実にしていく = 「内なる国際化」を推進していくためには長野県内で国際理解教育を推進されている先生方の力は必要不可欠であると考えていた。長野県内には、現在教職員として活躍されている青年海外協力隊に現職参加された先生方、帰国後教員になられた先生方、帰国後常勤等講師をされている先生方が 50 名以上いると考えられる。さらに JICA ボランティアの経験はなくとも、JICA ボランティアの体験談を授業にふんだんに織り込んだり、JICA の国際理解教育教材を積極的に活用されたりしている熱心な先生方も数多くおり、JICA 駒ヶ根としてはこれらの先生方に対してサポートをいかに行っていくか、先生方の要望をいかに長野県内の教育現場に還元していくか考えていくことが大きな課題となってきた。

③長野県内の教育現場が抱える大きな課題「外国籍児童への対応」

平成 17 年度初頭、当時の長野県教育委員会義務教育課長より、外国人が急増している長野県にあって、外国籍児童の教育問題は非常に大きな問題となっているが、同問題に対応できる人材は非常に少ないのが実態である、そのため途上国で協力活動を展開した青年海外協力隊 OB・OG で、長野県の教職員となっている方々の活用を県として考えているのでぜひ協力してほしいとの要請があった。これに対し JICA 駒ヶ根としても全面的に協力させていただくこととなった。

④「長野県教員等ネットワーク・プロジェクト」の開始

こうして青年海外協力隊現職参加教員をはじめとする長野県内の先生方の現状、長野県教育委員会の意向、そしてJICA駒ヶ根としては国内事業、市民参加協力事業を進めていく中で、先生方の持っているノウハウを長野県の財産としていつまでも保有していくことが必要不可欠であること、このすべての要素を充足するために「長野県教員等ネットワーク・プロジェクト」を立ち上げることがどうしても必要であることを痛感した。外部からの要望と、JICA駒ヶ根としての希望が絶好のタイミングで重なり、プロジェクトを立ち上げるに至った。

2. 国際理解教育の実践

(1)「長野県教員等ネットワーク」設立にあたって

①設立の目的

●青年海外協力隊等JICAボランティア経験者や、海外の日本人学校の教員経験を有する方々（以下、「在外経験教職員」という）の持つ国際感覚や、国際理解のノウハウを活用し、長野県在住の外国籍児童の支援体制や受け入れ体制の構築を進める際の提案を行う。

（→異文化適応・国際感覚・国際理解この3点の経験が豊富であるということが前提。）

●長野県教育委員会としては、将来、在外経験を有する教職員を外国籍児童の多い地域に派遣することを戦略的に実施したいと考えているので、県内の外国籍児童の多い地域での望ましい活動のあり方等について考えるとともに、必要な提案等を行なう。

●従来の国際理解教育には、知識として得たもので身近に感じられるものでなかったが、最近国内では外国人が急増し、外国人と共存せざるを得ない状況が生まれている一方で、外国人への対応には戸惑いが多いのが現実である。そのためにも国際理解教育を通し外国人に対して正しく理解することが必要となってきた。在外経験のある教職員は派遣された国々で得た体験等を通してその国を理解し、知ったことと、派遣前に得た知識や理解とは大きなギャップがあるということを実体験している。そういった実体験を通して国際理解教育を進めることにより、これらのギャップを縮めていくことは可能である。そのための提言等は在外経験のある教職員の得意とするところと思われるので、これらの貴重な経験を活かし、望ましい国際理解教育のあり方を提案していく

（→海外での2年間は良くも悪くも異文化を体験し異文化に適応してきた。そこで実感したのは自分達が海外に来れば「少数派」であるということである。日本に帰国して、今度は日本で少数派として生活している「外国籍県民」の立場が理解で

きるというのが在外経験教職員の強みである)

●長野県教員等ネットワークがしっかりした活動を実施すれば、長野県は「教育の長野」だけではなく、「教育と国際理解の長野」となる。この分野での先進県となることを目標とする。

②「長野県教員等ネットワーク」参加者の構成内容

●運営委員→青年海外協力隊現職参加教員、日本人学校勤務経験教員等5名で運営委員を構成する（小学校教諭、中学校教諭、高等学校教諭が必ず入り、義務教育と高校教育の壁をなくす）。

●参加資格→青年海外協力隊等 JICA ボランティア経験者や、海外の日本人学校の教員経験を有する方々、国際理解教育を推進又は将来国際理解教育に関わって行きたい教職員を中心とする。

●現時点での参加者→メーリングリスト参加者は現在50名、メーリングリスト未登録参加者は現在10名。（現職参加教員、帰国後採用された JICA ボランティア経験教員、日本人学校経験者、国際理解教育に熱心な先生方、青年海外協力隊 OB・OG で将来的に長野県での教員志望者、JICA 駒ヶ根職員等）

③実際の活動内容

●メーリングリスト

「長野県教員等ネットワーク」を立ち上げたときに元になったものがこのメーリングリストである。はじめは「長野県教員等ネットワーク」を立ち上げるための目的や概要（上述）をまとめていく際に活用していたが、現在も「長野県教員等ネットワーク」のメンバーが中心となって実施するセミナーのお知らせや、JICA 駒ヶ根からの国際理解教育に関する情報などをタイムリーに提供するための大切なツールとなっている。先生方の現場でのご苦労や悩み、それに対するアドバイスなど、現在でも活発な意見交換の場となっている。

●「ホームページ」の活用

先生方が実際に実践した国際理解教育の授業教材などを、どなたでも活用することができるように掲載している。この教材は長野県教育委員会が実施している「高等学校教諭10年研修」のテキストとして活用された。他方からのアクセスも多く、学校によってはリンクを依頼してくることもある。

●「教員セミナー」の実施

「長野県教員等ネットワーク」の運営委員の先生方が中心となって年に数回「教

員セミナー」を実施している。内容は実践してみた国際理解教育のモデル授業や、新しく帰国された現職参加教員による帰国報告会、時には長野県教育委員会からも講師を招いての意見交換会を設定するなど、今後の「長野県教員等ネットワーク」のあり方を見越したセミナーの企画、運営を行っている。

●各方面での講師としての活動

「長野県教員等ネットワーク」に参加している先生方が講師として講演等を依頼されることが多くなった。通常の出前講座として各学校から依頼されることも多いが、この前例のない「長野県教員等ネットワーク」の立ち上げに至った内容でぜひ話していただきたいという依頼も多く、今後も各方面での先生方の活躍が期待されている。

(2) 「長野県教員等ネットワーク」開設後の効果と課題

①「点」が「線」に

「長野県教員等ネットワーク」がいよいよ軌道に乗り始めると、今まで個々の学校で国際理解教育を実践してきた先生方が急激に連携を取り始めた。互いに「名前は知っているけれど」というレベルだったものが、「長野県教員等ネットワーク」が一つのツールとなって、今まで抱えてきたたくさんの悩みなどを打ち明けたり、自分の国際理解教育の経験を語ったりと、根本的なところから開始していくことができた。根本的なところで意思疎通ができていなかったことも明らかとなり、改めてこの「長野県教員等ネットワーク」の存在の重要性を、私も含め先生方も痛感したと思う。また、今までは高等学校の先生は高等学校の先生、義務教育の先生方は義務教育の先生、という風に「見えない壁」が国際理解教育にかかわらず顕著であったが、この「長野県教員等ネットワーク」ではそういった壁が全く取り除かれ、教員セミナーの企画などもそれぞれの持ち味を十分に活かせる内容を一緒に作っていくことができるようになった。以前はJICA 駒ヶ根が表立って企画していた教員セミナーも、「長野県教員等ネットワーク」の先生方が関わるようになってからは更に先生方のニーズに応えられる内容に向上させることができた。別件の先生方の連携事業としては、平成19年度に文部科学省の「国際協力イニシアティブ」事業へ、「長野県教員等ネットワーク」として案を提出することができた。平成19年度は見送りとなったが平成20年度も申請したいと、先生方の連携は継続している。さらには「長野県教員等ネットワーク」には、小学校から高等学校、特殊学校まで様々な学校の先生方が参加していることから、この環境を活かして、時には児童生徒が講師となって、いろいろな学校と交流しながら国際理解教育を進めていきたいという斬新なアイデアもあり、現実になる日もそう遠くはないと感じている。

②さらにより良くしていくために～課題として整備すべきこと～

●国際理解教育教材についての情報交換

平成18年度末に「長野県教員等ネットワーク」のHPが立ち上がったことから、懸案事項であった先生方の持っている教材や授業法などのデータベース化は徐々に進んでいる状態である。さらに、在外で経験したり入手したりした各国の情報（料理のレシピなど）をわかりやすい形で提供できるページを作成したり、JICA 駒ヶ根として提供できる教材を紹介するページを作成したりなど、更なる改善が求められている。積極的に活用していただくため、先生方が一番活用しやすい内容を今後も検討していく必要がある。

●国際理解教育の年間授業プランのモデル化

現在、「長野県教員等ネットワーク」に参加されている先生方の勤務する学校中で、数年かけてJICAと連携を図りながら授業を展開していきたいという学校が数校あり、ある程度の結果が見えてくるものと考えられる。数年かけて作り上げてきた内容を統合し「長野県教員等ネットワーク」参加者に投げかけ、ひとつの連携のモデル事例として提供することが可能であると考えられる。また現在所属学校で授業を展開しておられる先生も多いことから、毎年度末にこの授業プランを提供していただき、よりよい内容に整理して先生方に事例として提示していけるものと思われる。またこの「長野県教員等ネットワーク」のメリットは、義務教育と高校教育の壁がない、という部分であり、小学校の児童から高等学校の生徒まで、合同で授業が展開できる教材を作成していきたいと考えている。

●「長野県教員等ネットワーク」の位置づけ

現在「長野県教員等ネットワーク」は事務局機能をJICA 駒ヶ根が担っている。設立当初は、先生方の自主性を重んじ、数年後は先生方（運営委員）に事務局すべてをお任せするというようにしていた。3年を経過し先生方へ事務局を移すという時期になってきたが、JICA 駒ヶ根から事務局を先生方に移すには「長野県教員等ネットワーク」事務局をどこかの学校内に置くか、長野県教育委員会傘下として一つの研究会として扱うか、このままJICA 駒ヶ根に置くのか等、いくつか方法が考えられる。先生方の利用しやすい形態が一番望ましい形であることから、「長野県教員等ネットワーク」に参加されている先生方、長野県教育委員会、JICA 駒ヶ根の3者で引き続き検討していく必要がある。

(3) 「長野県教員等ネットワーク」と長野県教育委員会

当初「長野県教員等ネットワーク」が設立した目的のひとつにもなっていたが、長野県教育委員会が「長野県教員等ネットワーク」設立時に期待していたことは、途上国等でマイノリティの立場を経験したJICA ボランティア経験教員たちが、現

在長野県の学校現場で課題となっている外国籍児童生徒への支援を積極的に行なっていくことであった。日本に帰国して今度は日本で少数派として生活している「外国籍県民」の立場が理解できるというのが在外経験教職員の強みであり、これに基づいた教材作成、授業実践も積極的に行なわれるようになった。しかしまだこういった教材の共有、活用が十分に行なわれておらず、「長野県教員等ネットワーク」設立時に長野県教育委員会から依頼のあった部分についての連携は未だほとんどとられていない状況にある。長野県に JICA 駒ヶ根という国内機関があるという強み、JICA にしかない人材、まさにこの「長野県教員等ネットワーク」を最大限に活用していただくために用意した連携モデルを提示するため、昨年 12 月末に JICA 駒ヶ根所長、長野県教員等ネットワークの運営委員とともに長野県教育委員会を訪れ、今後の JICA との連携についての話し合いを行った。長野県教育委員会側は、「教育委員会は特定の外部団体と特別な関係を結ぶことはできないが、個々の行事に対し後援名義を出すことで支援していると捉えて欲しい」という意見のほか、こちらからの提案事項については非常に前向きに検討していただくことで話し合いを終えた。

(4) 長野県教育委員会への「長野県教員等ネットワーク」からの提案事項

上述の訪問の際にこちらから提案した内容は主に以下の 2 点である。

①「長野県教員等ネットワーク」メンバーによる講座(案)

目的：世界情勢はめまぐるしく変化していく一方、日本、更には長野県、学校での殺伐とした生活の中においてはその変化にすら気がつかずに日々を送りつつあるのが現在の学校現場である。この講座を通して世界で起きている様々なことを知り、日本にいただけでは理解できない諸事情を体感することで生徒児童に還元できることを発見してもらうことを目的とする。また青年海外協力隊等経験された先生方や日本人学校を経験された先生方を講師とすることで、「長野県教員等ネットワーク」の活動を活発化させることを目的とする。

開催日時：未定(年に 4 回程度のシリーズとする。)

開催場所：長野県総合教育センター(未定)

位置づけ：長野県総合教育センターで実施している講座のひとつとして時間を確保してもらう(公開講座でも可)。

参加人数：30 名程度

参加対象：長野県の教職員(小学校、中学校、高等学校、特殊学校等)
(公開講座の場合はこの限りではない)

講座内容(例)タイトル：長野県教員等ネットワークによる国際理解講座

●1回目「長野県教員等ネットワークと青年海外協力隊」

「長野県教員等ネットワーク」の活動内容と授業での活用法。また現職参加教員制度を活用して派遣された先生による授業の展開例と、長野県内で国際理解教育の出前講座等を積極的に展開している先生方の紹介。

●2回目「楽しい体験型授業の例～青年海外協力隊経験から学校への還元～」

バングラデシュのカレーの調理実習を実際に体験してもらい、衣食住についての紹介、青年海外協力隊の体験談など。

●3回目「マイノリティを体験して～外国籍児童とどう向き合っていくのか～」

実際に青年海外協力隊に参加してマイノリティの状況を体験して感じることを教材化したものを、参加者に体験してもらう。また様々な社会問題をどのように青年海外協力隊経験に結び付けて授業を展開しているのかを紹介する。

②長野県内学校多言語対応要員育成プロジェクトについて（案）

目的：長野県内における外国籍県民の人数はここ数年減少傾向ではあるものの、地域によっては人口の10%近くを外国籍県民が占めている。

これにあわせて外国籍児童の増加が長野県内の教育現場において顕著であり対策が課題となっており。

学校現場で特に問題となるのは、学校での出来事の伝達、問題行動の対処等生徒指導に当たる場合に、親御さんが外国籍の方の場合、意思疎通が非常に困難であることである。しかしながらその場面で対応できる教職員が長野県内には少なく、他の団体から通訳等を依頼しているのが現状となっている。また長野県教員採用試験において「特別枠」としてポルトガル語でコミュニケーションが可能な受験者優遇策等実施した年度もあったものの、その制度自体が持続不可能な状態となっており、多言語対応可能な教職員を必要とするは年々上がっている一方で対策が取られていない状況が続いている。

JICA 駒ヶ根が中心となって展開している「長野県教員等ネットワーク」は、3年前に立ち上がった際に、現在長野県の教育現場が抱えている外国籍児童への対応を念頭に活動してきた経緯がある。参加している長野県内の教職員の大多数が、青年海外協力隊等 JICA ボランティアや日本人学校等での活動・勤務の経験があることから、日本語や英語以外の特殊言語が堪能である。

今回、JICA 駒ヶ根では「長野県教員等ネットワーク」に参加されている先生方の語学能力を広く長野県内の学校現場で活用していただくことを目的として、先生方の言語能力を統合しデータベース化を進めていく。このデータベースを長野県教育委員会と共有し、可能な範囲で登録されている先生方を活用していただきたいと考えている。

一番需要が多いと考えられるポルトガル語に関しては、一般的にスペイン語が理解できていると比較的容易に習得できることから、JICA 駒ヶ根ではポルトガル語を話せる先生の育成を目的として、大多数を占めるスペイン語が堪能な先生を対象の「ポルトガル語講座」を年に数回集中的に実施することを提案する。

●特殊言語対応教職員データベース化について

方 法：JICA 駒ヶ根と長野県教育委員会とで「登録用紙」を共有し、随時登録可能とする。基本的に窓口はJICA 駒ヶ根とし、更新作業を進めていくがいつでも県教委の担当者に更新内容を伝達できるようにしておく。
登録資格：日本語・英語以外の言語でのコミュニケーションが可能な、長野県内の教職員に限定する。特にテストや資格申請は実施しない。該当言語での会話や読み書きなど支障のない程度のコミュニケーション能力があることが前提。また登録言語は利用性が少ないと考えられる特殊言語（ベンガル語やシンハラ語）の登録も積極的に実施する。

●ポルトガル語研修について

スペイン語でのコミュニケーションが可能である教職員を対象としたポルトガル語講座を実施することで、長野県内の教育現場で母国語がポルトガル語である児童生徒への対応をスムーズにするための人材育成を目的とする。

開催日時：夏休みや冬休みなど集中して時間が確保する時期を年間2、3回程度（1回につき5～7日間程度）。

会 場：長野県総合教育センター（塩尻市）（未定）
集中的に研修を実施するために、参加する先生方は宿泊していただき、青年海外協力隊派遣前語学訓練同様1日当たり5時間程度の研修を実施する。

講 師：JICA ポルトガル語講師またはそれに相当する語学講師をJICA 駒ヶ根で探す。

参加費：先生方の参加費は長野県教育委員会と協議の上決定する。宿泊費や食費を実費負担するか、出張扱いとして交通費等は長野県教育委員会に対応していただくなど先生方の負担を少なくしていただくご配慮をお願いしたい。語学研修費用は無料とする。

参加資格：○スペイン語が堪能であることが前提（2年程度スペイン語を使用した環境にあった、など）

○長野県内の学校に勤務する教諭、講師（小学校、中学校、高等学校、特殊学校あわせてクラスを作成）

募集人数：10名程度（初年度はこの程度の人数だがニーズに合わせて次年度以降増減可能とする。）

(5)「長野県教員等ネットワーク」設立にかかる重要ポイント

①人と人をつなげるノウハウの重要性

一般論として、青年海外協力隊等 JICA ボランティアに関しては、現職参加制度という存在はご存知であっても、制度を利用し派遣され帰国された先生方のその後の活動（学校現場での還元）に関しては、情報が行き届いていないと感じていた。その状況を長野県教育委員会に、どのようにして理解していただくのか、歩み寄って行くかが大きな課題である。

人脈をいかに開拓できるかが、「長野県教員等ネットワーク」が成功するか否かを大きく左右し、成功への突破口となった。特に長野県教育委員会内にキーパーソンになっていただけそうな職員を見つけることができたのが、「長野県教員等ネットワーク」設立が成功した要因だと考えている。些細なことであっても足を運ぶこと、長野県教育委員会と JICA 駒ヶ根が友好的に相互関係を築こうとした前向きな姿勢が人脈を広げることになったと感じている。

先生方も同様で、日頃からメーリングリストで意思疎通を図り、相談されたり、相談したりという関係を築いていった。セミナーや講師派遣、企画した多くのイベントに参加してくださった先生方と綿密に連絡を取り合うことで、予想以上に先生方とのネットワークを広げていくことができた。特に個人プレーに陥りやすい国際理解教育において「人脈」は最も重要であることから、情報を入手することはもちろんのこと、その情報をより迅速に提供できるツールを開拓していくことが回り回って人脈を広げることにつながるということを忘れてはならない。

②人は入れ替わるものだから

長野県教育委員会でも、JICA 駒ヶ根でも、人の入れ替わりを避けることはできない。一方で新しい見方、固定観念にとらわれずに斬新な情報を提供していくためにも人の入れ替わりは決して悪いことではないと考えている。

「長野県教員等ネットワーク」にとって、長野県の教育界にとって最大の財産はまさに先生方である。「長野県教員等ネットワーク」の質を下げることなく今後も持続させていくことは困難であるように思えるが、「長野県教員等ネットワーク」に参加されている先生方の熱意は尋常でなく、増すことはあっても減ることはないと確信している。先生方の熱意でさらに国際理解教育の輪が広がれば、「国際理解の長野県」といわれる日も遠くはないと感じている。それぞれの立場の人間がその場その場で「問いかけ」をしていくことが、今の良好な関係をさらに促進できるのだと思う。「長野県教員等ネットワーク」にしかできないこと、「長野県教員等ネットワーク」であるから可能であることを常に意識していることが重要であると考えている。

JICA駒ヶ根と連携しての国際理解教育の実践 —世界情報センター設置とその発展活動—

長野県中条村立中条小学校 西澤 浩

1. 実践の前提

筆者は平成12年4月から3年間、在外教育施設である日本メキシコ学院（日本コース）に中学部英語教諭として赴任した。

平成15年3月に帰国し、長野県駒ヶ根市立赤穂南小学校に着任した。そこで同校の学区にある国際協力機構駒ヶ根青年海外協力隊訓練所（以下JICA駒ヶ根）と国際理解教育分野で連携し、数々の実践を行った。

また信州大学教育学部・清泉女子大学人間学部と国際理解教育分野で研究を進め、平成18年より国立民族学博物館（大阪）の共同研究員として活動する。平成16年にはJICA教師海外研修に参加して、「スリランカ」における青年海外協力隊の活動を視察した。

現在、長野県上水内郡中条村立中条小学校に勤務。「自分はあと、まわりのみんなを幸せに」を学級目標にすえ、総合的な学習の時間で和太鼓・クリスマスリース作成や販売などに取り組んでいる。

2. 国際理解教育の実践

(1) はじめに

赤穂南小学校は駒ヶ根市の南部、飯島町と接する地域を学区としている。そこには美女ヶ森伝説を有する大御食神社（おおみけじんじゃ）や養命酒など地域を支える様々な史跡や自然を生かした伝統ある企業がある。しかしこの学区内に世界を支える重要な施設があることは、あまり知られていない。

それは日本と発展途上国の人々をむすぶ架け橋として、平和で豊かな世界の実現に貢献している国際協力機構・駒ヶ根青年海外協力隊訓練所である。（以下JICA駒ヶ根）

この青年海外協力隊訓練所は福島県二本松市と駒ヶ根市と日本に2カ所しかない。そしてJICA駒ヶ根では主に隊員候補生にフランス語、スペイン語、英語、シンハラ語等の7つの言語の訓練や生活訓練を行っている。

同校では、平成7年から年に3回、青年海外協力隊候補生との交流会を学校行事として位置付けている。そして隊員候補生との交流活動やそこで築き上げられた人間関係を軸に幅の広い国際理解教育を実践してきた。本稿では、今まで多くの方にご協力をいただいで実現できた「赤穂南小学校世界情報センター」設立の経緯と「世界情報センター」から発展してきた国際理解教育の実践をふり返る。

(2) 異文化に触れ、尊重していく子どもたち

同校では、国際理解教育に興味関心を持つ学級を中心に、年3回JICA駒ヶ根との交流を行っている。事前に隊員候補生が赴く国の歴史、文化、国旗、国歌などについて児童が事前学習を行い、模造紙等にまとめている。

交流を行っている学級の壁には、主に図書館やインターネットで収集した情報をもとにメキシコ、エクアドル、セネガル、チリ、バングラデシュ等に関する学習資料が掲示されていた。同校では、1年間のトータルとして20カ国以上に派遣される隊員候補生と交流を行っていることになるが、まず異文化体験で印象に残っているフィジーを紹介する。



●楽しい民族衣装体験

フィジーへの隊員候補生との交流では「カバの儀式」を実際に体験した。これは南太平洋でとれるヤンゴナ（カバ）根をくだき、汁をしぼりだして飲む来客のための儀式である。子どもたちは民族衣装を着込みココナツの杯を使い、作法に従って儀式を進めていった。①手を2回たたく。②「ブラ」（フィジー現地語で「こんにちは。」を意味する。）と言って右手で受け取る。③お目つけ役が手を

たたく。④ひと口で飲み干す。⑤杯を返し3回手をたたく。⑥「ビナカ」（現地語で「ありがとう。」を意味する。）と言って終わる。日本では馴染みのない作法と儀式の進め方に「いろんな儀式をやってから飲むなんて面倒くさいな。」と感想を残したが、「来客のために心を尽くしてもてなす。」という心配りは日本と同じことに気づいた。

この他にも、民族衣装体験をはじめとしてスペイン語、フランス語、ベンガル語、シンハラ語といった普段なかなか接することのできない言語やエクアドルのお菓子「チューロ」、ニジェールのお菓子「ベニエ」作りの体験をした。

(3) 見えてきた国際理解教育の問題点とその克服

交流会では子どもたちが聞いたこともないような国を、隊員候補生は丁寧に教えてくれる。また青年海外協力隊員となってボランティアとして活躍したいという強い意志は子どもたちに前向きに生きることの大事さを伝えてくれた。さらに交流会以後も、学級宛に海外から情報をメールやお手紙で送ってくれる。そこには日本を離れボランティアとして働く苦労や、楽しさが書かれている。

しかしそういった海外からの貴重な情報も一部の学級にとどまり、国際理解教育が学校全体や地域に広がっていかない問題点が指摘された。

「国際理解教育は難しい。」と言われるが、それが以下の点に理由をもとめることができる。

- ①教師側の既有的知識や狭い範囲の体験をもとに教室で教育実践をせざるを得ないこと。(必然的に学校の外部組織との連携を図らないと実現できないことになる。)
- ②既有的知識が誤っていたり、時代的に遅れていたたり、的外れであったりすることがしばしばあること。(教材に関する情報の更新が常に求められる。)
- ③海外の学校と交流をしても、実際に相手の息づかいや相手の姿が見えてこないこと。(国際理解教育が継続的にならず単発的イベント的に流れやすいことにつながる。)

①～③の理由が国際理解教育が学校としての継続的な取り組みになりにくい理由である。又、学級担任の意欲にその正否が関わっており、作成した資料も年度末に散逸してしまうことが非常に多いのである。

国際理解教育は地域社会との連携の上でも同校の重要な教育活動として位置づけているので、国際理解教育に興味のある教師だけの実践でなく、学校全体、さらには学区にJICA駒ヶ根を有する地域の乗り越えていかなければならない大きな課題であった。

そこで上記の問題点を克服し、国際理解教育を全校と地域に広げ、青年海外協力隊をより多くの人に知って支えてもらうために国際理解教育に関わるコーナー『名称：赤穂南小学校世界情報センター』を開設したいと考えた。

情報センターは基本的に「4つの性格」を有する。

- ①『世界の民芸品、教科書、民族楽器、切手など世界の文化を児童が直接体験できる場』
- ②『世界各国の児童生徒との交流の場』
- ③『国際理解教育のための資料の蓄積の場』
- ④『青年海外協力隊の活動を地域、学校に紹介をする場』

(4) 世界情報センター設置のために動き始めた子どもたち

「全校に今まで勉強してきた青年海外協力隊のすごさと世界のいろいろな文化を伝えよう！」…最初に子どもたちに呼びかけたのは平成16年11月であった。子どもはこの目標に興味関心を持ち、一連の活動計画を『プロジェクトX』と名付けた。具体目標は「赤穂南小学校と地域のみなさんに世界のことをわかりやすく紹介しよう！」として、いよいよ12月本格的に活動が始まった。

①情報センターの展示物を集めよう！

子どもたちがまず取り組んだのは、情報センターに展示予定の品物の確保である。名付けて『お手紙作戦』。青年海外協力隊候補生との交流会で知り合えた青年海外

協力隊員をはじめ JICA 駒ヶ根・JICA 東京・国際協力プラザ東京本部・国際協力推進協会・信州大学・在日ネパール王国大使館・在日グアテマラ共和国大使館・在日スリランカ大使館・日本アフリカ学会などに品物の提供をお願いする総数 30 通以上の手紙を送る大作戦であった。

そして徐々に民芸品、ポスター、民族楽器が集まってきた。最終的にその数 200 点以上。ネパール大使館、パラオ共和国大使館からは、大使から激励のお手紙も頂いた。

プロジェクト X は本当にすごいな！なぜなら今まで見たことのない品物が見られるからだ。教室の中は展示品でいっぱい。バングラデシュのうちわには本当にびっくりした。日本のものは手でうちわをあおぐが、バングラデシュのうちわは持つところに竹がついていて、その竹を中心にうちわをまわすのだ。この仕組みにはびっくりしたし、すごいと思った。世界から送られてくるものを見るときは本当にワクワクする。ワクワクしながら開けるとおもしろい物がいっぱいある。ポスターやチェス、帽子もあってかぶってみる。コインを必死にみがいている友達もいる。きたなかったコインは「あっ」というまにピカピカになる。そのデザインがなかなかおもしろい。タンザニアのコインの裏面はすべて動物だ。本当に驚くことばかりだ。
(児童 A)

また京都大学からのアフリカの紙幣の寄贈もあり、子どもたちはこの計画に夢中になっていく。

上の児童の感想に見られるように、児童は海外から集まった民芸品に触れ、その整理や紹介文を作成するなかで、国旗にはそれぞれ意味があり、それぞれの国には文化があることを学んでいった。その姿の中には、「この民芸品が優れている。」「こちらの楽器のほうがすばらしい。」という視点がない。

今後、世界の品物にふれることで、文化の差を知ることはあっても、文化に優越はないとする考え方により近づいていくことが想定できる。



●世界の切手・紙幣もあつまりつつある



●教室に一時展示された民芸品の数々

(5) 赤穂南小学校世界情報センターのオープニング

平成17年3月24日ようやく世界情報センターがオープンした。当日はJICA駒ヶ根所長、駒ヶ根市前教育長そして多くのマスコミ関係者も来校され、世界情報センターのオープニングを祝った。

「とうとうやりました！」本当に世界中のみなさんの協力で、今日のセレモニーを迎えることができました。

11月に西澤先生に「自由文庫に青年海外協力隊と協力して世界中から物を集めてみよう。」と言われたときは、驚きました。

まず心の中で「そんなのできっこない。」と思っていたからです。

だけど、だんだん世界から物が集まってきたら、楽しくて楽しくてしょうがなかったです。たとえばバングラデシュやコスタリカから大きな段ボールが届きます。

何が入っているのか考えながら段ボールを開けるのは、本当にドキドキします。

例えばバングラデシュの段ボールには見慣れぬ物が入っていました。それが調べてみると「うちわ」だったので本当にびっくりしました。世界の楽器もどんどん集まりました。音を出してみるとなんか、本当に世界にいるみたいです。僕は心の中で「全校のみんなに見せたらびっくりするだろうな～」とニヤニヤしながら準備を進めました。

3学期の最後の方で展示がいよいよ始まりました。休み時間に言ってみると多くの方が、僕たちが作った資料の前にいます。本当にニヤニヤしました。

今日、このセレモニーができるのも青年海外協力隊のみなさんや地域のみなさんのおかげだと思います。ありがとうございました。

僕たちは、このセンターを通じて赤穂南小学校の児童のみなさんや地域のみなさんが世界のことや、青年海外協力隊員が世界でどんな活動をしているか知ってもらえればいいです。
(児童N)

校内に世界の情報が集まっているという感覚は、教師、子どもたちにも確実に広がったと言える。さらに世界情報センター設置は市の公報活動にも後押しされて、多くの方から物品の寄贈が相次ぎ、この情報センターは地域の国際理解教育の拠点としてその役割を順調に果たしてきた。

そして長野県教育委員会の視察やJICA 新任職員の見学など幅広い発展を示し、同校職員においてはJICA 駒ヶ根の視察や体験キャンプへの参加など意欲的な姿につながりつつある。

《世界情報センターの展示物》



●パプアニューギニアのギアンガ高校から

●隊員の皆さんにもらったメッセージ



●兵馬俑・中国

●整理された学習資料



(6) 情報センターから発展する学習活動

①世界の現状を青年海外協力隊員と JICA 駒ヶ根から学ぶ

平成 16 年 12 月のスマトラ島沖の大地震のあと、青年海外協力隊員からメールが届いた。

スリランカが被災してから 6 月 26 日で半年が経ちました。協力隊隊員は被災直後からずっと被災地支援活動を続けています。ある時 1 人の赤ちゃんを抱いたおばあさんと話をしました。その赤ちゃんは生まれて半年でした。そう誕生日は 12 月 20 日で生まれて 6 日目に津波の被害でお父さんもお母さんも亡くしたそうです。おばあさんはご主人も亡くしたようです。言葉も出ませんでした。被災地の人は私たちが来たとき何かもらえるんじゃないかって集まってきます。しかし、私たちは物を支援しにいったわけじゃありません。自分たちは被災者のためにできることを見つけなくてはけません。そこで手遊びをしたり



●被災地で活動する隊員

りボール遊び、綱引き等子供から大人まで一緒に歌を歌ったり、年齢別に分かれて遊んだりしました。みんなすごく楽しんでくれたようで笑顔も沢山見ることができました。

物も必要だけど、両親や友達を失った悲しみは一生心の中から消せない記憶だしそのときの恐怖も今は笑ってても心の奥に残ってるから心のケアがすごく大切じゃなかったって考えさせられました。

また時を同じくして JICA 駒ヶ根から「国際緊急援助隊」の訓練があるという情報を頂いた。国際緊急援助隊とは大規模な災害に対して日本政府が派遣する救助チームである。スマトラ沖地震、パキスタン大地震等に出動している。この訓練の参観や送られてくるメールを通して児童はより世界の現実を学んでいく。



●援助隊訓練の様子

スマトラ沖地震の記事を読んでも「大変だね。」と言う自分は、心から思っている訳じゃなかった。

でも国際緊急援助隊の訓練や青年海外協力隊員のメールを読んで、実際に苦しんでいる人をすごく身近に感じた。親を亡くした子どもの話をしているというメールは変な気分だった。

そしてそこで汗水流して救助に向かう、日本人がいるということは全く知らないことだった。

(児童M)

②W隊員の情報からプロジェクトFへの発展

スリランカのW隊員からメールが届いた・・・

*平成17年5月23日

保育所は3ヶ月から5歳までの子がいます。子供は世界共通でかわいいです！！

この前保育所に訪問した際、子供達は何もないフロアーにポツンとみんな座っているだけだったので紙飛行機を一つ作ってあげました。

使い方を知らないので使い方も見せながら、一緒に遊びました。子供達はその1つの紙飛行機を半日（私がいる間）使っていました。折れ曲がったら直して、飛ばなくても追いかけて。日本ならきっと飛ばなくなったら新しいのを作っちゃいますよね。でもここにはそんな材料はないから。すぐに新しい物に変えたらいいという考えもたぶんないのかもしれませんが。

でも、物を大切に使わなくちゃって改めて感じました。

子どもたちはこのメールを読んで、「何か自分たちでできることはないか？」と考えた。

「必要な文房具を送ればいい。」という考えもあったが、「それでは（物を大切にしてほしい。）というW隊員の願いとは違ってくる。」という意見も出てきた。結論はなかなか出てこなく、持ち越しになった。

数日後、子どもからこんな考えが出てきた。「牛乳ビンのふたは活用できないか？」という意見であった。本校は給食の際、牛乳が必ず出される。その毎日捨てている「牛乳ビンのふた」を集めてスリランカのW隊員に送れば、物を大事にすることにもなるし喜ばれるのでは・・・という考えだ。

早速、W隊員に提案できる牛乳ビンのふたの活用法を考え始めた。「手裏剣」「真ん中に楊枝をさしてコマ」「ふたの白い部分に数字を書いて神経衰弱」「黒く塗ってオセロ」「車の車輪」「宝探しゲームの宝物」「のれん」などがでてきた。この方針が学級会で決定されてから学級は牛乳ビンのふた集めを始め、スリランカのW隊員に送る準備を始めた。1枚1枚必ず水洗いをし、教室で乾燥させ、W隊員が使いやすいようにきれいにした。

この計画の名前は『プロジェクトF』。Fは「ふた」の頭文字からとった。この7月にスリランカに赴く青年海外協力隊員に品物を託し、その返事のメールが7月30日に届いた。

みなさんこんにちは。っといっても夏休みですよ。今日、皆さんからの贈り物を JICA 事務所で受け取りました。本当にありがとうございます。中をあけて見たとき、きっとみんなが1人1人何がいいのか考えて箱に詰めたんだろな〜って思ってたすごく嬉しかったです。

これは私が今いるエステートの子ども達に日本の子ども達からといって届けます。

もちろん「牛乳のフタ」をどうやって使ったらいいかのアイデアも先生達に伝えます。どんなおもちやができたか、子ども達がどう使っているかまた日がたったらメールでお知らせします。そして私の所属する事務所やオフィスにも日本の子ども達からということや、こんな形で国際協力に関わってくれている事等話したいと思います。本当にありがとう。

このスリランカのW隊員とのやりとりは、衛星回線を使つてのスリランカの小学生との文化交流会に発展したことを付け加えておく。

(7) JICA 駒ヶ根と連携した実践をふり返って

平成 15 年 4 月に赤穂南小学校に着任して以来、「学校の特色ある教育課程とは？」が頭を離れなかった。そんな中、JICA 駒ヶ根隊員候補生との交流があると聞いて、交流会に参加したいと考えた。赴任してわずか2ヶ月後で暗中模索の中であったが、総合的な学習の時間の第1歩を踏み出したことになる。当時のことを思い出してみると他に交流を希望する学級も多くなく、行事の1つとしての印象を持った。しかし実際に隊員候補生と打ち合わせをもつてみると、隊員候補生のもつ意欲、そして熱意が非常によくわかった。厳しい環境で自ら世界の人のために頑張りたいという強烈な熱意をひしひしと感ずるのである。その隊員候補生たちの姿から「これはすばらしい国際理解教育の実践につながり、ひいては本校の財産になるだろう。」と考えはじめた。その時に JICA 駒ヶ根・市民協力調整員に出会えたのはまさに僥倖であった。交流会の充実や「世界情報センター」の開設のためにアドバイスを実に多くいただいた。

市民協力調整員との出会いはさらに、駒ヶ根市の商工会議所、駒ヶ根市役所に多くの協力者と出会うことにつながっていった。つくづく「人」と「人」のつながりが大事であるかを学んだ。自分一人ではできなかったであろうし、実際に現在海外で活躍されている青年海外協力隊員の協力がなければ今回の一連の活動は実現できなかったと思う。

児童は2年間の JICA 駒ヶ根と連携した活動の中から実に多くのことを学んだ。世界には日本と違った貧しい国があること。その貧しい国に行ってそこに住む人の

ために多くの日本人がボランティアとして活動していること。世界のできごとは決して人ごとと考えるのではなく、自分たちができないことはないかと考え、実行することの大切さ、そして意欲を持ち、力強く生きていくことの重要性である。

児童の感想の一つを掲載する。

「JICA 駒ヶ根と一緒に勉強する前は、世界や他の国など興味はなかったけど交流を始めてからは、見る世界が広がったような気がする。自分たちが住んでいる日本だけが世界ではないことがわかった。それは世界に目を向けている多くの人と出会えたからだと思う。

青年海外協力隊員のように知らない国、知らない言葉があるという場所へ行くというのはとても勇気がいることだと思う。でもそれぞれの夢をかなえるために、海外へ出て行くというのは本当にすごいことだと思う。私は隊員候補生の先生方と交流をして悔いを残さないために、自分のやりたいことを求め、そして実行する大切さを学びました。そんな気持ちを持ちながら中学校に進学したいと思います。」

(児童N)

グローバルイシューから考える 国際理解教育の実践

長野県塩尻志学館高等学校 駒村 英明

1. グローバルイシュー

(1) グローバルイシューに関するテーマ

学校教育において、世界のことを知る、世界のことにについて考える学習の必要性は年々高まっている。高等学校公民科の科目「現代社会」は、広い視野にたつて現代の社会を考察し、理解を深めるための科目として設置されている。この「現代社会」では政治経済や青年期の課題等のテーマとともに、環境問題、エネルギー問題、食料問題、戦争や紛争、経済格差と貧困などのいわゆるグローバルイシューが取り上げられ、重要な位置を占めている。国際化への対応や国際社会の理解、また幅広い視野を持った人間の育成のためこうした地球的な規模の問題が注目されているからである。

(2) グローバルな視点で考える

現代社会が抱える課題を理解し、その克服について考えるには2つの視点を持つことが大切である。1つは現代社会の諸課題を身近な問題として捉え、自分たちの生活にひきよせて考え、共感するミクロ的な視点であり、もう1つは世界の国々や人々を相互に深いつながりを持った一つの集団として捉え、世界全体を見渡す視点で考えるマクロ的な視点である。この2つの視点から考えることで、現代社会の諸問題についての理解を深めるとともに、社会と自己の関わりを考えることができるのである。

2. グローバルイシューから考える授業実践の例

(1) 授業の展開

本校の「現代社会」の授業では、以下の5項目を扱う。

- 現代に生きる私たちの課題
- 現代の社会生活と人間
- 現代の民主政治と日本国憲法
- 現代の経済社会と国民生活
- 国際社会と人類の課題

このうち「現代に生きる私たちの課題」においては、地球環境問題、資源・エネルギー問題、科学技術の発達と生命の問題、日常生活と宗教・芸術、豊かな生活と社会福祉などの諸問題を扱い、現代社会における諸課題を様々な視点から追究して、現代社会への関心を高めることから始める。そして社会生活と人間の関わりや現

代の民主政治、現代の経済社会を扱った後、「国際社会と人類の課題」の項目において人口と食糧、人種・民族問題、国際紛争、経済格差と貧困、人間の安全保障を取り上げ、国際社会における諸問題を理解し、その克服に向けた取り組みを考え、そして世界における日本の役割と世界の中での自己の役割についての自覚を深めるのである。

この「現代に生きる私たちの課題」および「国際社会と人類の課題」の項目において、地球環境、エネルギー、食糧、戦争・紛争、難民、経済格差・貧困の6テーマを取り上げ、自分の海外ボランティアの体験や海外の人との交流経験を取り入れた授業内容を考え、その一部を実践した。

(2) 森林に関する授業の展開例

地球環境に関する授業では、森林、水、大気、河川について実践した。ここではその中から森林をテーマにした授業の一例を紹介したい。

【第1時間目】

指導事項	指導上の留意点
<p>☆☆世界のこと☆☆</p> <p>◎世界の人口</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>[質問] 現在、地球上には何人の人間が暮らしているのだろうか？</p> </div> <p>→世界の人口約 66 億人</p> <p>◎様々な人々、様々な文化</p> <p>→世界には様々なことば、生活習慣、食べ物、住居、宗教…がある。</p> <div style="text-align: center; margin: 10px 0;">  </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; width: 45%;"> <p>たくさん食べて、飲んで、ほしいものを買って…</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px; margin: 5px 0; text-align: center;"> <p>経済的に豊かな人 (先進国の人)</p> </div> </div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; width: 45%;"> <p>ほしいものを買えない、お腹いっぱいにならべられない人も…</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px; margin: 5px 0; text-align: center;"> <p>経済的に貧しい人 (途上国の人)</p> </div> </div> </div>	<p>※世界の人口、文化の多様性については既習事項。ここでは復習。</p>

◎不平等な世界

→世界の富はたった20%の豊かな人が80%を持ち、
貧しい80%の人はわずか20%の富を持つにすぎない。



[質問]日本はどちらだろうか？

☆☆数字から考える☆☆

◎数字から考えよう



[質問]この数字は
何だろう？

→ヒントをだす。



まずは単位を考えて
みよう

→1秒間に1,000,000 ? 。

◎大量消費

→(答え)1秒間に100万枚

世界ではたった1秒間にA4の紙を100万枚使っている。但し、文書用紙のみ(トイレットペーパーや包装紙は除く)



[質問]紙は何からつくられるのだろうか？

※特に前置きはせず
パネルの数字を見せて
考えさせる。(数字
から推理する面白さ)

※意見が幾つか出た
後にヒントを与える。

※まずは単位を考え
させる。

※100万枚はイメージしにくいので、
500枚の束が5つ
入ったA4用紙の箱
(2500枚入)を印刷
室から持っていく。
これが400箱になる。
(これでもわかりにくいかも
もしれない。)

※木材の多くは先進
国で使用される。

→紙は木材からつくられる。
私たちがたくさん使う紙。
紙以外にも木材は大量に消費される。



[質問] 紙の原料である木材は、どこから切り出されてくるのだろうか？

◎森林伐採

→熱帯林が広がる東南アジア、南米アマゾン、アフリカの赤道周辺地域やタイガなどの森林（天然林や人工林）から切り出されてくる。

世界の森ではたくさんの樹木が伐採されている。

☆☆エクアドルのこと☆☆

◎生活・自然・子供たち・・・

→エクアドルの人々の生活や自然についてのスライドを見て、説明を聞く。

[質問] 写真を見てどんなことを感じたか、感想をあげてみよう。

◎進む開発

→エクアドルアマゾンにも開発の波が押しよせている。



◎エクアドルアマゾンの原住民の話

[質問] 大切なエクアドルの森はどうなってしまうのだろうか？

→このままでは、やがてエクアドルの森も切り開かれてしまうはず。

エクアドルアマゾンの原住民の間で語り継がれてきた話を聞こう。

※森林伐採や日本の木材輸入については既習事項。

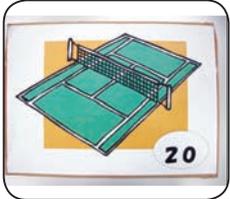
※エクアドルアマゾンに暮らす人の生活や自然をスライドで見る。開発の現状がわかる写真を使用する。

「ハチドリのひとしずく」
 森が燃えていました。
 森の生き物たちは、われ先にと逃げていきました。
 でも、クリキンディという名のハチドリだけは、
 行ったり来たり、
 くちばしで水のしずくを1滴ずつ運んでは
 火の上に落としていきます。
 動物たちはそれを見て
 「そんなことをしていったい何になるんだ」
 といって笑います。
 クリキンディは、こう答えました。
 「私は、私にできることをしているだけ。」
 『ハチドリのひとしずく』より

※「ハチドリのひとしずく」を読んで聞かせる。

※読んだ後、生徒の感想を聞いてもよい。
 第1時間目はこれで終了。

【第2時間目】

指導事項	指導上の留意点
<p>☆☆森を救うには☆☆ ◎森は減少している</p>  <p>[質問]このパネルの絵と数字は何をあらわしているのか考えてみよう。</p> <p>→ヒントはやはり1秒間に [?] 。</p>   <p>→(答え)世界では1秒間にテニスコート20面分の天然森が切り開かれている。</p> <p>◎森を救う</p>  <p>[質問]どうすればエクアドルの森を救えるのだろうか？</p>	<p>※自分たちの紙の消費と合わせて考える。</p> <p>※テニスコートで考えると広さが実感できる。</p>

森を救うには、まず伐採される樹木を減らすこと。



→伐採される樹木を減らすには、紙の消費を減らすことも1つの方法。



→クリキンディは小さい。しかし、クリキンディが

[質問] みなさんは一人ひとりがハチドリです。自分が今できることは何ですか？

10羽、100羽、1000羽・・・と集まって、みんなが協力すれば大きな力になる。

[質問] 私たちは毎日の生活の中でいったい何ができるだろうか？

☆☆森を救うには～その2☆☆

◎自分たちができることを考えよう

[グループワーク]

ルールに従って、グループで1年間に紙をどれだけ節約できるか考えよう。

また、紙の節約で伐採されずにすむ樹木は何本か、それによって救われる森林の広さはどのくらいか考えよう。

→自分たちが毎日の生活の中で具体的に何をすれば紙の節約ができるのか、その方法を話し合い、意見をまとめる。



→自分たちが紙（トイレトペーパーや包装紙は除く）の節約方法を話し合う。それを[ルール1]に従って、A4の用紙に換算し節約できた枚数を算出する。（グループのメンバー全員の1年間の合計数）

[ルール1] 例えば・・・

A. 新聞紙1枚 = A4用紙約7枚・チラシ1枚 = A4用紙2枚

B. 雑誌1冊 = A4用紙に換算すると130枚など

グループは5～6人がよい。

※ルールはおおよそを目安として設定したもの。

※板書するか大きな紙に書いて掲示する。

※生活に欠かせないものについては減らせない。

→節約した用紙の枚数は樹木何本にあたるか、またテニスコート何面分にあたるかを [ルール2] に従って算出する。

[ルール2] 例えば…

- A. テニスコート1面には木が15本はえている
- B. 一本(高さ8m、直系14cm)の木からはおよそ12,500枚の紙がつくれる
- C. テニスコート1面でおおよそ25万枚のA4用紙がつくれる

→自分たちで考えた方法を大きな紙にまとめて書く。また、最後の部分にはテニスコート何面分の森林を救えたかも書く。

→グループごとに発表する。



●中学生への授業で、グループの一つが書いたもの

→今日の授業のまとめを書く。まとめたものを発表する。

[準備するもの]

- ・パネル(厚紙に用紙を貼ったもの)
- ・マジックペンのセット
- ・模造紙
- ・まとめの用紙



※ルールの数値は各種データから計算したものであり、正確なものではない。身の周りにある具体的なものでイメージを持たせるための参考。

※テニスコートに換算することが大切。自分たちが救った森の広さが実感できる。※救った森の広さを競うのではなく、さまざまな意見やアイデアを評価する。

※他のグループの意見を聞いて、多くの方法があることに気付く。

※授業者によるまとめと全体での振り返りを行う。

3. まとめ・課題

国際社会で世界中の人々と共生していくため、国際理解教育が必要であることは教育現場において認識されている。しかし、実際に国際理解教育が系統的に、継続的に行われてケースは少ない。それは教育課程上の問題も確かにあるが、国際化が身近になっていないこともその一因ではないか。国際化といいながらもまだ海外の国々は遠く、外国人は自分たちの近くに生活していたとしても、それは遠い存在なのかもしれない。生徒に質問すると、その多くは自分の身近に外国人が生活していることは知っているけれど、一度も話したことが無いとこたえる。

今回提示した実践は貧弱な知識に基づいた不十分な内容だが、何かを発想するきっかけにはなるかもしれない。たいへんな準備や多くの物品を使用するのではなく、少し工夫するだけで簡単に実践できる授業の提案をこれからもしていくとともに、国際理解教育に役立つノウハウや人材に関する情報の提供を長野県教員等ネットワークの一員として行っていきたい。それにより国際理解教育は社会において、更なる広がりを見せるだろう。一方で外にばかり目を向ける国際化ではなく、自分の身の周りのことに目を向け、日本人が身近に暮らす外国人の存在と文化を正しく認識して、その文化を尊重しながら互いに共生を模索していく「内なる国際化」の一助となる活動を今後も積み重ねていかなければならない。

4. 参考文献等

- 石 弘之『地球環境報告』(岩波新書)(岩波書店、1988年)
- 石 弘之『地球環境報告Ⅱ』(岩波新書)(岩波書店、1998年)
- 山本良一・Think the Earth Project『1秒の世界』(ダイヤモンド社、2003年)
- 辻 真一(監修)『ハチドリのひとつづく いま、私にできること』(光文社、2005年)
- 環境省編『環境白書(平成18年度版)』(ぎょうせい、2006年)
- 環境省ホームページ(地球環境・国際環境協力) <http://www.env.go.jp/earth/> (2008年3月21日確認)

帰国後の活動より

—カンボジアとのインターネットライブ交流授業に取り組む—

長野県小諸市立美南ガ丘小学校 中山 晴美

1. はじめに

平成14年7月から平成16年3月まで、青年海外協力隊（現職教員派遣制度 JOCV 14-1 カンボジア 体育）として、カンボジアで活動をしてきた。カンボジアでの生活は、今となってはたった1年9ヶ月というとても短い期間であるが、日々新しい発見があり、泣いたり、笑ったり、怒ったり、悩んだり、感動したり…と、毎日何らかの形で心を動かされるできごとがあった。

何もなかったところに、ぽつんと置かれた形でいた私だが、その時、その時…今、自分にできることは何かを考え、それが正しいかどうかは分からないが、自ら行動し、失敗も繰り返しながら何とかやってくることができた。

今でも、そこで出会った人たちや、毎日起こったエピソードなどを懐かしく思い出しては、私にとって貴重な体験をさせていただいた、忘れることのできない、かけがえのない日々だったと思っている。

現職教員特別参加制度を使い青年海外協力隊としてカンボジアの地に立った私には、三つの大まかな目標があった。一つは、現地の一人でも多くの子どもたちにスポーツ（運動）の楽しさ、素晴らしさ、必要性を伝えること、二つ目は、私自身の教員としてまた、人としての資質を高めること、そして、三つ目は、ここでの経験を帰国後、日本の子どもたちのために生かすこと。

その三つの目標は、どれもすぐに結果がわかるものではなかった。短い活動期間で私が精一杯やってきたことが、現地の人の心に伝わり、生活の中で生かされるようになるには、これから長い時間がかかるだろうし、私自身、どこか成長したのだろうか…と考えても、そう簡単に分かるものでもない。ましてや、三つ目の「日本の子どもたちに…」の目標については、これから先、私が教員を続けている限り、またそれ以上ずっと続けていきたい…いかなければならないことだと思っている。

活動を終え、帰国の時を迎えた。カンボジアは、日本と違い3月が年度末ではないため、年度真只中に後ろ髪をひかれる思いで帰ってきた。それでも、帰りの飛行機の中では、日本で待っていている子どもたちに『あんなことも話そう、こんなことも…』と考えていた。

これからは、日本と途上国を『つなぐ』ことが、私たちの役割として大きな位置を占めるのではないかと私なりに考えていた。

2. 帰国後のささやかな試み

(1) 子どもたちに伝えたい！

4月から再開した日本での学校の生活は、そのリズムに慣れたり、目の前にあるひとつひとつのことをこなしたりすることで時間が過ぎていった。『今の私にできること』でさえ何一つやっていない…と気づいたときは、もう夏休みが目の前に迫った頃だった。

そこから、厳しい現状を理解しつつ、今の自分にできることは何かと考えた末、私の中に出てきた答えは、『伝える』ことと『行動する』こと。早速、私はまず目の前にいる子どもたちに『伝える』ことをはじめた。

私が、これまで主に話してきたことは、カンボジアで出会った子どもたちのこと。週末によく出かけるアンコールワットには、たくさん子どもたちが生活していて、その子どもたちと会って話したり、遊んだりして過ごす時間が私の楽しみだったこと、また、そこで出会った子どもたちの笑顔に元気をもらって過ごしていたこと、その子どもたちは与えられた環境の中で精一杯生きていること…など、たくさんエピソードを交えて話してきた。

もうひとつ、限られた時間の中で伝える方法として、壁新聞の形をとった『カンボジア便り』を発行した。

内容は、私の伝えたいことを思いつくままに書いたものだが、張り出すたびに子どもたちは群がるようにして読んでくれた。そこから、話題が広がっていくこともあった。



●子どもたちの笑顔



●壁新聞「カンボジア便り」



(2) ある日の日記より

そういったささやかながら『伝える』ことを続けていく中で、こんなできごとがあった。それは、一人の子どものこんな日記から始まった。

今日、家に帰ってから、インターネットでカンボジアのことについて調べてみました。首都は「プノンペン」ということがわかりました。国境は、プノンペンのことを調べたときに一緒にのっていたのですぐ調べられました。

時間があつたので、他のことも調べてみようと思いました。すると、何枚かの写真が出てきました。その写真をいろいろクリックしていくと、笑顔の女の子が出てきました。

「この子、かわいいな」と思い、ページをどんどん送っていくと、その子の足が片方ないことに気づきました。それは、地雷というものが原因だと書いてありました。私はどきどきしながら、その写真をじっと見ていました。「とても悲しいことなのに、どうして笑顔なんだろう」「もし、私だったら笑顔でいられるだろうか」と考えると、またどきどきもどってきました。

前に、先生が話してくれたカンボジアの子どもたちことを思い出しました。この女の子も、片方の足がないことを不幸と思わず、それ以上の幸せを感じて精一杯いきているのかなと思いました。

今日は、その一枚の写真でいろいろなことを考えました。もっとカンボジアのことを知りたいと思いました。

ごく普通の日常生活の中のできごとだが、『何かが伝わっている』と、嬉しく思った瞬間だった。この日記が動機づけとなり、カンボジアについてクラスで詳しく調べてみることになった。

(3) インターネットライブ交流会へ

そんな活動を始めた頃、インターネットライブ交流会のお話をいただいた。これは、カンボジアの子どもたちとインターネットを使ってライブで交流をするというものだ。私ひとりの考えではできないので、クラスの子どもたちに相談したところ、すぐに「やりたい」という返事が返ってきた。もし、あの日記がなく、子どもたちのカンボジアへの思いがもっと弱いものであったら、こんな快い返事は返ってこなかったかもしれないと考えながら、子どもたちと共に『行動』に移すことになった。

この交流会には、あまり具体的ではないが、私なりの思いがあった。カンボジア任期中に現地で実際に先輩隊員の行ったインターネットライブ授業を見せていただいたことがあった。それは、カンボジアの孤児院の子どもたちと、日本の小学校の児童たちとの交流で、お互いに聞きたいことを質問しあったり、歌を交換し合ったり、映像としてそれぞれの教室を見せ合ったりなど、とても充実したものであった。特に、カンボジアの子どもたちの立場で考えると、まだ見たことのない日本の様子や学校、子どもたちのことを知るができる良い機会になったのではないかと思った。

ただ、日本の学校で行われる学習という立場で見ると、たった一回の交流ではそれを深めることができたのか…という疑問があった。もちろん、その交流をきっかけに学習を深めていくことは工夫次第では可能だと思うが、ちょっともったいないなあと思ったのだ。

もし、できることなら、事前事後の学習のことや、それぞれの子どもたちの興味あること、質問によりの確に答えていくことなどを考えると、長いスタンスでの計画から数回の交流ができればよかったのではないかと思った。

例えば、初めは情報のみからのあまり知らない状態での交流になると思うが、交流によって得たもの、交流によって受けた質問などから、次の交流までに子どもたち自ら課題をみつけて学習を進めることができるのではないかと、さらに、自分たちで作ってきた学習の形を反省し、もう一度挑戦してみる…など、深まりのある学習になるのではないかと想像していた。

また、カンボジアの子どもたちにしてみると、その時は、日本の四季とか、学習の内容、流行っている遊びなどに興味があったようだが、日本の子どもたちがその場で質問に答えることができず、結局、先生が答えていたような場面があった。特に四季などは言葉で説明するのは難しいが、数回に渡り、回りの景色の移り変わり（雪がつもっている、桜が咲いている、紅葉…など）を直接見てもらうことで、伝わるものもあるのではないかとも思っていた。

理想を言えば、そういったカンボジアの子どもたちが知りたいと思っていること（日本では想像もつかないこともあると思うのですが）を交流によって日本の子どもたちが知り、それを伝える手立てを考え、創り上げて再び伝えることができ、またそれが継続的にできたら素晴らしいと思っていた。

そんな思いを理解していただき、実践に移すことができた。

(4) 第一回インターネットライブ交流会

第一回交流会はお互いの簡単な紹介と、それぞれに聞いてみたいことや知りたいことを質問するという内容で進めることにした。

言葉の違いや子どもたちの実態から、質問に対する答えは次回までにまとめるということになり、一回目は質問のみだが、カンボジアについて知り始めた子どもたちからは、たくさん知りたいことがだされた。

相手は、現地で活動中の隊員が配属されている、バットンバン州のワット・カンペイン小学校。こちらが5年生ということもあり、5・6年生の子どもたちと交流をさせてもらった。

言葉については、相手にも日本語とクメール語の両方分かる隊員がいてくれたこともあり、うまく役割分担して進めることができた。

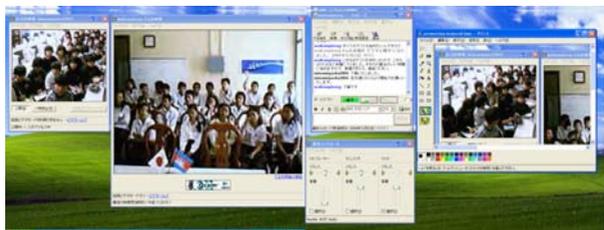
<お互いに出された質問>

カンボジア→日本

- ①日本にはどんな珍しいものがありますか？
- ②日本の経済が繁栄しているのはなぜですか？
- ③日本にはどんなスポーツがありますか？
- ④日本では、生徒は何色の制服を着ていますか？
- ⑤カンボジアに遊びに来たいですか？
- ⑥あなたの学校は一日に何時間勉強をしますか？
- ⑦休み時間はどんな遊びをするのが好きですか？
- ⑧学校が休みの日、どこに遊びに行きますか？

日本→カンボジア

- ①いつもどんな遊びをしていますか？
- ②言われて嬉しい言葉は何ですか？
- ③カンボジアで日本語を話せる人はいますか？
どんな仕事をしている人ですか？
- ④カンボジアの国歌や有名な歌を教えてください
- ⑤戦争についてどのように思っていますか？
- ⑥戦争前はどんな国だったか親や家族に聞いたことがありますか？
- ⑦今の生活に満足していますか？
- ⑧日本人の私たちが、カンボジアの人たちの役に立てることはありますか？



●第一回インターネットライブ交流の様子

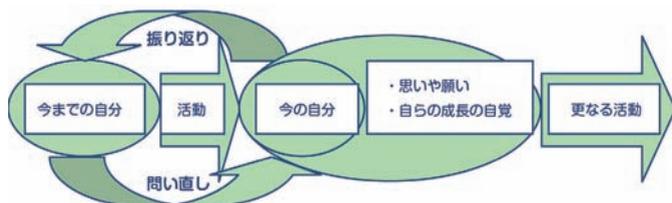
(5) 子どもたちの感想より

- 言葉が違う国どうしの交流で伝えたいことが通じるかすごく心配だったけど、カンボジアから「よくわかりました」と言われたときはほっとしてうれしかった。
- 交流するまで、カンボジアの人は「かわいそう」と勝手に思っていたけど交流してみて印象が全然違った。仲間だと思った。
- 「カンボジアに遊びに来たいですか」と質問された瞬間、私は心の中で「行きたい！」と叫びました。すごく離れていて会うことができないけど、本当はもっと話したいと思ったからです。
- 「日本の経済が繁栄しているのはなぜですか」と質問され、はじめは意味さえ分からなかった。そんなことを知っていることに驚いた。日本に興味があるのかな？もっともっと日本のことを伝えたい。そのために自分たちが知らなければならないことがたくさんあるような気がした。

●「私たち日本人が、カンボジアの国のためにできることはありますか」と質問した。どんな答えが返ってくるか楽しみだけど、ただ答えを待っているだけでなく、また、カンボジアについていろいろ調べて、次の交流までに自分でも答えを探しておきたいと思った。

(6) 示唆されたこと

子どもたちは、これまでの学習を振り返り、今の自分の在り方を問い直す中で、自分の本当の思いや願いに気づいたり、自分自身の成長を実感したりしながら、より深く広く人や物事に関わっていこうとするのではないかと・・・



(7) 第二回交流会に向けて

一回目の交流会で、感想を持ち、次の課題を見つけた子どもたちは、質問の答えを見つけると同時に、カンボジアの子どもたちは、なぜこの質問をしたのかと考え始めていた。それを具体的にすることで、よりの確かな（相手の求めている）答えが見つかると考えていたのだろう。

質問の答えを見つけることは、相手に目を向けたことから一度自分自身（日本）を振り返ることになる。知らないことについては調査なり、インタビューなりしなければならない。

また、ライブの特性を生かして、言葉だけでは伝わらないものについては、視覚で伝えられるような資料の工夫も、子どもたちのアイデアから生まれてきた。

そんな活動を重ね、何とか自分たちの力で答えを見つけ出していった。

(8) 第二回交流会

第二回交流会では、お互いに用意した質問の答えを伝え合う活動となった。



●第二回インターネットライブ交流会の様子

(9) 子どもたちの感想より

●僕は、ふだん機械ゲームで遊んでいることが多かったので、カンボジアの人の遊びを聞いておどろきました。枝・布・石などが、主な遊び道具になるなんて…。僕たちがふだん何とも思わない物で楽しい遊びになっているなんてびっくりしました。枝や石、布なども考えれば、楽しい遊びが他にもありそうな気がして、思うだけで楽しくなりました。僕も、カンボジアの遊びをやってみたくなりましたし、カンボジアにますます行ってみたいくなりました。

●「今の生活に満足していますか」という質問の答えで、「とても満足している」と言っていてすごいなあと思いました。私は、あらためて、「日本人はすべてのことにぜいたくすぎる」と思いました。私だったら「とても満足だ」なんて言えないかもしれません。

●ぼくは、カンボジアの人に戦争について質問をしました。でも、ぼくはこの質問をするのがいやでした。どうしてかというと、その戦争を思い出して気にさわるのではないかと考えたからです。でも、オーイ・ソクンティアリーさんは、堂々と「カンボジアの人はもう戦争をする必要はないと考えている」と答えてくれました。僕はそのことがうれしかったです。

●「言われて嬉しい言葉」は、私なら「ありがとう」とか「上手だね」とか自分をほめてもらうような言葉だと思うけど、返ってきた答えは「家族がずっと幸せでありますように」といった、家族や他の人を思う言葉だった。カンボジアの人は、家族や友だちを大事にしているんだなあと思いました。

3. 終わりに

今回の交流を通して、交流自体は2回だけのイベント的なもののように思えるが、そこに至るまでの子どもたちの気持ちの動きや、学習してきたことはとても充実しており、貴重な経験をさせていただいたと感謝している。今まで知らなかった国のことを知るだけでなく、自分の生活している日本という国について振り返る場面があり、その良さを改めて知ること、さらに深く、広く人や物、出来事に関わっていけるのではないかと考えている。

現在（2008年2月）、帰国して4年を迎えようとしている。

私の目標の一つである「協力隊での経験を帰国後、日本の子どもたちのために生かすこと」は、もちろん今も続いている。時間が経てば経つほどその思いが強くなり、いつも「まだまだ、これから！」と思っている。目の前にいる子どもたちは、毎年毎年変わっていく。だから、終わりが無いのである。

今年度、私の担当したクラスの子どもたち（6年生）は、私の予想とは全く違う『アフリカ』に目をつけ学習を進めていくことになった。アフリカを全く知らない私は、正直、子どもたちの本当のアフリカを伝えることができるのかと不安だった。

しかし、今回は「私自身の経験」そのものというのではなく、協力隊として参加して得ることのできた「人脈」に頼り、進めていくことにした。

あるアフリカの方が「日本がアフリカのためにできること・・・それは、まずアフリカを知ること・・・本当のアフリカを・・・」そして「本当のアフリカを知るには、アフリカを知っている人から教えてもらうこと」と話してくれた。そこから、実質クラスの活動の方向が決まっていった。人と人とのつながりを頼りに、アフリカの方、アフリカに向けて実際に活動をしている方、アフリカンドラムやアフリカのダンスを学び伝えている方々・・・たくさんの人から『本当のアフリカ』を教えていただくことができた。

カンボジアの子どもたちとインターネットで交流した子どもたちにも、アフリカに関わるたくさんの人たちから学んだ子どもたちにも共通して言えることは『本当のことを知ることの大切さ』である。

それまでのメディアや表面的な印象から得た知識から生まれる感情は、共通して「かわいそう・・・」「何かしてあげたい」だった。しかし、交流や本物に触れる機会から知ったものの中には「かわいそう」は少しも無く、多くは「わたしたちと同じ」「ぼくたちよりすごいものを持っている」「もっと知りたい」と変わっていく。

ここ（小学校）での学習には限りがあるが、ここで『本物』を知ることが今後の生き方に大きな影響を与えるのではないかと期待している。私自身もこれから多くのことを『知ること』そして子どもたちに『伝えること』を続けていきたいと思う。

【資料（第二回交流会の内容）】

（1）カンボジアの子どもたちからの質問 → 日本の子どもの答え

①日本には、どんなめずらしいものがありますか。

私たちが選んだ日本のめずらしいもの4つを紹介します。

最初は『東京タワー』です。日本の首都東京にあります。高さが333メートルあります。放送用のアンテナとして使われています。観光客もたくさん来ています。

次に、『着物』という服を紹介します。日本に古くからある服です。今は七五三・成人式・結婚式など特別なときに着ます。この写真は私が着たときのものです。

次に、『富士山』を紹介します。富士山は日本で一番高い山です。3776メートルあります。登山客がよくこの山を登ります。冬になると雪がきれいです。

最後に『奈良の大仏』を紹介します。身長は14.5メートルです。奈良県の東大寺にあります。世界三大仏のひとつです。終わります。

②日本の経済はなぜ繁栄しているのですか。

昔、日本の人たちは、長い間戦争をしていて食料などが減りこまっていました。日本の人たちは、このままじゃ食べられない生活になってしまうと思い、畑を作ったり、食料を外国から取り入れたりして工夫し、努力しました。

外国からの考えをお互いに教えあって、それを元に自分たちでも考え、たくさんの物を開発したことで今の生活ができるようになったと私たちは思います。終わります。

③日本にはどんなスポーツがありますか。

日本にはたくさんのスポーツがありますが、その中から二つ選んで紹介します。

一つ目は『すもう』です。皆さんはすもうというスポーツを知っていますか。すもうは日本の国技です。円い場所から相手を押し出ししたり、転ばせたりすると勝ちです。すもうをする人たちは、みんな太っていて力があります。

二つ目は『スキー』です。冬にやるスポーツです。板とストックを使って、雪の上をすべるものです。私たちも、冬になるとスキーを楽しみます。終わります。

④日本の生徒は、何色の制服を着ていますか。

私たちの学校は制服というものがありません。だから、どんな色の服を着てきてもいいのです。でも、運動をするときは、運動着といってみんな同じ服を着ます。季節によって青や白の服があります。

中学校からはちゃんとその学校の制服があります。私たちの行く中学校は黒色の制服です。中学校にも運動着があり、学年ごとに紫・青・黄緑と色が分かれています。終わります。

⑤カンボジアに遊びに来たいですか。

クラスの人全員に聞いてみると、39人中36人がカンボジアに行きたいといいました。

理由は『行ったことがないから』『おいしい食べ物がありそう』『いろんな遊びがありそう』『行ってどんな国が知りたい』などがありました。

逆に、行きたくないという人が3人いて『行ったことがないから少し不安』という理由でした。終わります。

⑥皆さんの学校は一日に何時間勉強しますか。

私たちは、8時15分に学校に来て、午後の4時に帰ります。学校は月曜日から金曜日で、曜日ごとに勉強する時間は違います。この表を見てください。5年生の場合、月曜日と水曜日は5時間、火曜日、木曜日、金曜日は6時間勉強します。給食が1時間、そうじは20分です。終わります。

⑦みなさんは、休み時間にどんな遊びをしていますか。

私たちは、休み時間にドッジボールをやっています。これは、ボールを使った遊びです。これが、ボールです。年に2・3回の大会があります。これは、僕たちが実際にドッジボールの大会に出たときの写真です。

冬は雪が降るので雪合戦という遊びもします。雪の玉を作って投げる遊びです。寒いけど、からだがあたたまる遊びです。雪合戦をやったときの写真です。終わります。

⑧学校が休みの日、みなさんはどこに遊びに行きますか。

クラスでアンケートをとり答えをまとめました。『友達の家』『公園』『ゲームセンター』などが多い答えでした。

ゲームセンターというのは、ひとつの場所にたくさんゲームがおいてあるところのことです。終わります。

(2) 日本の子どもたちからの質問 → カンボジアの子どもたちの答え

①いつも、どんな遊びをしているのですか。

私は、ワットカンペイン小学校、5年K組のヌオン・ソティエリーです。カンボジアの子どもの遊びを5こ、紹介します。

まず、ボツ・チューがあります。これは、二つに分かれてしばった布を相手に当てる遊びです。

2番目は、レアック・コンサエンというものです。これは、円になり人の後ろに布を落として追いかける遊びです。

3番目は、スヴァート・ドンダウム・スロック・チューです。これは、葉っぱのついた木の枝を投げあう遊びです。

4番目は、スダッチ・チョンです。これは、二つに分かれて、ひとりずつ前に出てくるのですが、次に出てくる人の名前を当てる遊びです。

最後は、ボツ・オンコーンです。置いてある相手の石に自分の石を当てる遊びで

す。ビデオを撮りましたので、後で送ります。見てください。

②言われてうれしい言葉は何ですか。クメール語で教えてください。

6年K組のサット・コサルです。私（僕）たちが、言われてうれしくなるような言葉を4つ紹介します。

ឆ្លង លា អ្នក អោយ មាន សុខភាព ល្អ 「幸運で健康でありますように」

សូម អោយ អ្នក រៀន ល្អ ថ្ងៃ 「勉強が、よくできますように」

សូម អោយ អ្នក មាន សំណាង ល្អ ពេល ដែល អ្នក ធ្វើ ដំនើរ ទៅ

ណា មក ណា 「どこに行っても、いい運に恵まれますように」

សូម អោយ អ្នក មាន សេចក្តី សុខ ភ្នំ ក្រសារ របស់ អ្នក រហូត ដល់

អរិយ្យ

「あなたの家族が、ずっと幸せでいますように」

③カンボジアの人で、日本語を話せる人はいますか。もしいるとしたら、どんな仕事をしている人ですか。

6年K組のモン・ティアラです。日本語を話せる人について、答えます。カンボジアでは、日本語を話せる人は大変少ないです。

日本語を話せる人は、例えば、先生や観光業（旅行の仕事）、航空会社、大きな図書館で働いている人、通訳などの仕事についています。

④カンボジアの国歌や、カンボジアで有名な歌を教えてください。

5年G組のシパー・カンチャナーです。歌について、答えます。カンボジアの国歌は、ノコー・リエチエといえます。

有名な曲では、スタップ・ベッドーン・オーン・ポーンという曲があります。2曲とも、あとでビデオに入れて送りますので、見てください。

⑤みなさんは、戦争についてどんな風に思っていますか。

5年X組のオーイ・ソクンティアリーです。戦争について、答えます。カンボジア人は、もう戦争をする必要はないと考えています。なぜなら、戦争は社会を荒廃（荒れ）させ、没落（おとろえ）させ、国自身の経済を破壊（こわす）するからです。社会の人々を、経済的に助けるため、全世界の人々と協力していかなければならない、と私たちは、みんな考えています。

そして、全てのこと、特に教育にかんすることを発展させていきたいです。教育は、カンボジアの人たちの知識を豊かにし、間違った知識をやめさせるからです。そして、肩を組み合って協力し、経済を築き、日本のように発展させていきたいと考えています。

⑥昔（戦争前）は、どんな国だったか、親などに聞いたことはありますか。

5年G組のヨッ・サヴォンです。戦争前のカンボジアは、全てのこと、特に経済や社会に関することで、繁栄していたと聞いています。

⑦今の生活に満足していますか。

6年G組のペアッカダイです。私たちは、私たちの生活に満足しています。そして、国の人々を繁栄させ、ますます（さらに）すばらしくさせたいです。そして、学校の生徒を良くし、友人を良くし、子どもたちを良くしていきたいです。

⑧日本の私たちが、みなさんの役に立てることはありますか。

5年K組のオム・オンピーヤーです。もし、みなさんが、カンボジアの生徒を援助したいと思ってくださるのなら、学校で使う道具や校舎がいいと思います。

協力隊経験（パラグアイ・音楽）を 生かした国際理解教育の実践

相模原市立上溝小学校 小澤 明子

1. 実践の前提について

(1) 略歴

- ①大学院時代から海外の芸術（主に美術）に興味を持ち、教員1年目から海外派遣の道を探っていたが、教員8年目にして協力隊への参加を実行。
- ②1年9ヶ月間（現職教員派遣制度利用）南米パラグアイにて現地の幼稚園、小学校、中学校、教員養成学校で音楽を教える。
- ③現地赴任中実施したこと（パラグアイ・音楽派遣 15年度1次隊）

- 教員養成校での音楽の教え方の指導
- 配属された市や近郊の町の先生方の音楽教授法の向上のための講座（3ヶ月間）
- 配属された小学校の先生方の希望により児童合唱団の設立
- パラグアイの音楽の指導要領を翻訳
- 日本音楽、パラグアイ音楽を紹介する演奏会を企画（クラリネット、ボーカル担当、14回パラグアイ全土で行った）



●教員養成校1年生に日本から持参した楽器を紹介

- チャリティーコンサートの実施（アスンシオンのスーパー大火災の被災者のため）
- 音楽の教科書と付属のCDの制作
- 子どもたちのためのキーボードのレッスン（2週間・のべ40人）
- パラグアイの民族楽器「アルパ（ハーブ）」を習う
- パラグアイの現地語（グアラニー語）を習う



●音楽の先生のための教材作り（音階を書いているところ）

- ④帰国後、以前の小学校に戻り、総合的な学習の時間を使って4年生学年全体の音楽祭「南米スペシャル」を企画。以後も毎年ハーブやパラグアイの簡単な紹介を行っている。



●サンタクララ小学校の合唱団。記念式典で歌を披露した

2. 国際理解教育の実践

(1) 帰国後実践してきたこと (概要)

① 2005年川尻小学校4年

- 総合的な学習の時間を使って音楽祭「南米スペシャル」を企画
- 教員の研修会での発表2回（湘北地区、県）
- 朝会で全校児童にパラグアイハーブの紹介

② 2006年上溝小学校4年

- 各国語のあいさつ
- 県の音楽会で担任を持つ4年3組が「花祭り（ポリビアの曲）」を披露、学年の音楽会で南米を中心にした組曲を各クラスが演奏
- 朝会で全校児童にパラグアイハーブの紹介
- 担任の4年生1クラスにパラグアイの文化とハーブの紹介
- 1年生4クラスにパラグアイハーブの紹介
- 自民党、公明党議員への現職教員派遣の実践報告

③ 2007年上溝小学校5年

- 各国語のあいさつ
- 道徳の授業（国際理解教育の価値）で5年4クラスと筑波大附属小4年1クラスで授業
- 新採用教員への国際理解教育の模擬授業
- 保護者への国際理解教育の模擬授業
- 筑波大附属小での実践報告



●筑波大附属小4年生への授業

(2) 実践の詳細

①日頃の朝や帰りの挨拶を各国語で（日直と何語にするか相談する）

日頃の朝や帰りの挨拶を各国語で（一週間同じ言語で）

最初の1年目は日直と毎日何語にするか決めていたが、決めるのに迷う子が多く、時間がかかるので2年目からは1週間同じ言語にした。

朝の挨拶や、健康観察で「元気です、まあまあです」、給食をもらうときに「ありがとうございます」など自然に覚えることができ、テレビやまんがなどで出てきたときに「知ってる!」と興味を持つことができた。

また、「パラグアイ語を教えて!」と言ってきたときに、「パラグアイやそのほかブラジル以外の南米、中米は全部スペイン語なんだよ。」と答えることで、南米についての知識も広げることになったであろう（資料1参照）。

資料1 学級通信（3月12日 No.29）

どれくらい覚えているかな！？書いてみよう！

今回は一年間に覚えたいろいろな国のあいさつのおさらいです！

日本語	おはよう (こんにちは)	(はい、) 元気です	まあまあ元気	ありがとう	さようなら またね
英語	グッ	グレ	ファ	サ	グッ
中国語	ニイ	？	？	シエ	サイ
ドイツ語	グーテ	ゼア	グ	ダ	アウ チュ
スペイン語 (中南米)	ブエ	ムイ	アシ	グラ	アディ チャ
イタリア語	ボン	モル	コジ	グラッ	アッリ チャ
フランス語	ボン	トレ ウイ、	ビ	メル	オッ
ロシア語	ズド	オーチ	ハラ	スパ	ダッス
ポルトガル語 (ブラジル)	ボン	ムイ	ベ	オプリ	アテ
ルーマニア語	ブナ	ダ、スン	？	ムル	ラ レベ
タイ語	サワッ	サバ	？	コー	ラー
タガログ語 (フィリピン)	マガン	マブ	イリ	サラ	アバ
ミャンマー語	ミン	ホデ、	？	チュー	ミン
グアラニー語 (パラグアイ)	ンバエイ	オーマル	イボ	アグイ	ジャジョ

②授業での紹介（旗のクイズ、ニャンドウティドレス、パラグアイハーブ体験）

- 17年度 川尻小4年生3クラス（約120名）
各1時間
- 18年度 上溝小4年生1クラス（32名）1時間
1年生4クラス（約120名）各20分間
- 19年度 上溝小5年生4クラス（約130名）
各1時間
3年生3クラス（約120名）各20分（予定）



●一年生は興味津々

資料2 国際理解教育授業の指導案
本時の展開

分間	学習内容	支援
10	1. パラグアイの紹介 ①衣装について ②場所クイズ、地球儀 ③海外青年協力隊 ④パラグアイの気候と様子（牛、のんびり） ・牛肉 ・果物 ・マテ茶 ⑤世界で唯一の旗クイズ	・一回りしてさわらせる。 ・世界地図を描き、クイズにする。地球儀 ・牛と町の写真を出す。 ・グアンパ、ジェルバをみせる。 ・アサードの写真 ・旗を見せる ・子どもたちの写真
10	2. パラグアイの子どもたちの紹介 ①言葉が通じるか不安だったけど、子どもたちは明るくて、音楽好き。 ②スペイン語のあいさつをしてみよう！ 「オラ！ケタル？」 「ムイ ビエン！」 ③授業について ④貧しさ（はだし、栄養不足）があるが愛情表現が豊かなパラグアイが好き。「ミ アモール」「ミコラソン」ドスベン	・子どもたちの写真 ・2人組で練習する。
20	3. パラグアイ音楽の紹介 ①アルパ・ピアノのような楽譜がない。見て覚える。 ・色が付いている弦は何の音？ ・ファとド ②曲紹介とクイズ ・ジェガダ ・ピリリータ、カスカーダ、トレンレチェロ ③みんなでひいてみよう ④まとめ ・千と千尋 ・みんなもいろいろな国の人にふれあってみるといいですね。世界が広がります。 4. 質問コーナー	アルパを見せる。

評価 パラグアイのことを知ることで海外のことに興味を持てたか。

※ 20分間の時は3のパラグアイ音楽の紹介から授業をする

<旗のクイズとは・・・>

パラグアイの旗は世界で唯一の裏表のある旗です。

(図参照) 裏にはある動物がかかれています。さて何でしょう。

1. ライオン
2. ワシ
3. ねずみ (答えは下図)



●パラグアイの旗 (表)

③運動会でパラグアイ人、ドミニカ共和国の人 (JICA 研修員) を紹介

日本の文化にふれる機会として運動会に招待した。大きなパラグアイ人と肌の黒いドミニカ共和国の人に子どもたちは興味津々で取り囲み、「ブエノス ディアス! (おはよう)」、「アディオス! (さようなら)」と早速スペイン語で挨拶していた。

④町の音楽祭りでの企画 (総合を利用して「南米スペシャル」を展開)

「南米スペシャル」

曲目1 「メロディアス デ アメリカ」4年全クラス (108名) 国旗や国の名物などを調べて作ったプラカードを上げながら歌う (写真1, 2)

2 「花祭り (ボリビア)」1組 (35名) ボリビアの楽器を使って (写真3)

3 「パラグアイのクリスマス」2組 (36名)

4 「コンドルは飛んでいく (ペルー)」3組 (37名)

5 「ラバンバ (メキシコ)」4年全 (108名) スペイン語で、振り付けもつけて



写真3 「花祭り」(ボリビア) を演奏左端がボンボ、次がチャフチャフ、マトラカ (ボリビア隊員に借りました)



旗のクイズの答え: 1. ライオン
ライオンは正義のシンボルです。



写真1 国名を書いているところ



写真2 歌いながらプラカードをあげる練習。うまくできました。

資料3 指導案

4年 たつご指導案 国際理解にふれる活動 2学期

(たつごとは川尻小の総合の名称です。)

1. 単元名 「南米スペシャル」

2. 単元の目標

- 南米の国々の名前や国旗を知ることにより、南米の国々に興味を持つ。
- どこかで聞いたことのある南米の音楽を中心に知り、南米音楽の身近さを知る。
- 協力し、楽しみながら一つのものを作り上げ、発表を通して他者に伝える喜びを知る。

3. 観点別評価の規準

- 探求心（関心・意欲）……………南米の音楽の中にはテレビなどで聞いたことのあるものも多いことを知り、それらの曲がどのような国のものか積極的に調べようとする。
- 問題解決（問題解決力）……………課題解決に向けて、家の人に聞いたり、図書室の本や、インターネットを使ったりして自分なりの方法で課題に取り組む。
- 人との関わり（関わり力）………家の人に聞く活動や、友だち同士で協力しながら国のことを調べたり、音楽を作ったりする活動を通して人との関わり力の良さを知る。
- 表現（表現力）……………いろいろな楽器やその演奏の仕方、歌い方、動きなどを工夫して表現しようとする。

4. 指導計画（計35時間）

次	学習内容・指導（時間）	評価の観点	評価規準	評価の方法
み つ め る 8	・南米の音楽について、子供たちが興味関心を持って本単元に取り組められるような話を聞く。(1) ・「メロディアス・デ・アメリカ」という曲を練習し、この曲を通して南米の国々の名前や国旗に興味を持つ。(7)	◎探求心 ・問題解決 ・人との関わり ・表現	・南米の身近な曲がどのような国のものか積極的に調べようとする。	・振り返りカード ・白地図プリント
も と め る 6	・南米の国々の名前や国旗を調べ、さらに表現したい国を決め、表現方法を考える。(例：旗作りなど)(6)	・探求心 ◎問題解決 ・人との関わり ・表現	・進んで表現したい国を決めて、楽しく調べている。	
ふ か め る 10	・ボリビアの楽器と音色、その音楽を聞き(1)さらに南米の音楽に興味を持ち、クラスごとにどのように各国の音楽を表現するか話し合う。(5)	・探求心 ・問題解決 ◎人との関わり ◎表現	・進んで楽器にさわった仲間と感想を言い合ったりしている。	

	(ボリビア、パラグアイ、ペルーなど) ・学年としてのまとめるためのメキシコの曲「ラ・バンパ」を練習する。(5)		・話し合いや練習に意欲的に関わっている。
うごきだす11	・「南米スペシャル」という組曲として各国のつなぎの言葉を考え(1)、学年でまとめたひとつの作品に仕上げる。(5) ・音楽祭りで発表する。(4) ・自分たちの活動をまとめ、ふりかえる。(1)	・探求心 ・問題解決 ・人との関わり ◎表現	・楽しく堂々と表現しようとしている。

⑤朝会を利用してパラグアイの旗のクイズ、ニャンドウティドレス、ハーブのクイズと紹介

●川尻小(約600名)20分

●上溝小(約800名)15分

<ハーブのクイズとは・・・>

パラグアイハーブ(アルパ)の曲には動物や自然の音を模したものが多いのですが、次の曲は何の音を表した曲でしょう。(写真4)

1. ピリリータの最初の部分を演奏する

答え: 鳥(ピリリータという鳥の鳴き声を表している)

2. カスカーダの最初の部分

答え: 滝(カスカーダはスペイン語で滝)

3. トレンレチェロの最初の部分

答え: 列車(トレンレチェロは牛乳列車という意味)

(3) 教職員に対して

①津久井郡小学校音楽部研究会においてパラグアイの教育事情、スペイン語の簡単な挨拶、文化(食べ物、国民性など)、ハーブ演奏と体験の講座を持つ・1時間半

②職員研修会3回(配属校教員対象15分、湘北地区教員対象45分(写真5)、神奈川県教員対象25分)でパラグアイの配属校の子どもたちと日本の教え子たちの「笑顔のために」のプロジェクトによる交流とパラグアイの教育事情、文化(食べ物、国民性など)、ハーブを紹介

3. まとめ ～これから派遣される方たちへ

現職教員派遣では現地での活躍はもちろんのこと、帰国後の活動にも焦点が置かれているだろう。そこで、これから派遣される方に現地でどういった物を集めておけば帰国後すぐに役に立つかまとめたと思う。



写真4 ハーブの演奏



写真5 湘北地区教員研究会

●写真（できればビデオ）

現地の様子・自分が授業をしている様子、現地の先生が授業をしている様子、子どもたちから日本へのビデオメッセージ、よく食べる料理、珍しい料理、祭りの様子、貧しい家、貧しい人々（撮るのがなかなか難しいが）、裕福な家、きれいな町並みなど。

●実物

ハーブ等の現地の楽器、打楽器（誰でも音が出せるので子どもたちがさわりやすい）衣装、特産物（置物のような物）、日本でパラグアイ人の友達を作って子どもたちに紹介するなど。やはり子どもたち（大人でも）には100話をするより1見せ、ふれさせるのが一番。

●衣装があるといい（ダンス、祭りの衣装など）お面やかぶり物も楽しい

ニヤンドウティドレスは高かったので（日本円で2万円）買うのを迷ったが買って良かった。派手なぐらいでも楽しい。任地にいる間も祭りの時など着て交流を図るといいだろう。

●ダンスや現地の楽器の演奏、現地の料理などを習ってみては

専門外でも、何かできると紹介しやすい。料理の場合、日本で手に入る材料でできるかも重要になる。実際に現地で何回か作ってみるとよい。

●日本に戻ってから地域の国際行事にアンテナを張ろう

地域の国際行事に目を向け、参加してみよう。市役所、駅などの公共の建物に行事の宣伝があるときがある。私はそれでJICAの研修員（パラグアイ人、ドミニカ共和国人、ペルー人）と友達になり、そのつながりで創価大学の留学生（ボリビア人、キューバ人、イスラエル人、アメリカ人）とも友達になった。また、八王子市では通訳ボランティアを募集していたので登録した。人の輪を広げることで、子どもたちにも紹介できる機会が増えるかもしれない。

2005年3月にパラグアイから戻ってきて、この経験を日本でどう生かそうかと色々考えてきた。日々の学校生活の中で時間をとることが難しく、子どもたちの実態により内容も考えなければならない。そうなると紹介できないまま時間が過ぎていってしまう。だから、堅く考えずに、ちょっとした時間に気楽に楽しく紹介をしようと思った。とくに職場の人や自分の記憶の新しく、やる気がある1年目が勝負だと思う。

国際理解の第一歩はまず「知る」ことである。それも楽しくである。いろいろな国を知ることで親しみがわき、それにより、「仲良くしたい」「日本を紹介したい」「助け合いたい」という気持ちが育っていくだろう。

だから、私はどんな機会でも「パラグアイっていう国があるんだ、なんだかおもしろい」という気持ちをまず持つてもらえるようにこれからも子どもたちや先生方にパラグアイを紹介したいと思う。

帰国隊員をゲストティーチャーに招いた 国際理解教育の実践

筑波大学附属小学校 鎌田 和宏

1. 実践の前提

平成19年度の筑波大学附属小学校国際教育協力拠点形成事業では、帰国隊員の活動支援を重点に活動を進めてきた。そこでは現職派遣教員を中心とする教育協力の経験者に帰国後の活動を調査し、活動を支援するためにはどのようなことが必要なのかを探ってきた。帰国隊員の多くは、赴任国での経験を生かして国際理解教育の実践に取り組まれている。しかし、帰国後の多忙な日常から、勤務校の自分の学級、自分の所属する学年や他の学年での実践にとどまるケースが多く（実はそれすら大変なのであるが）貴重な経験を地域に広げていくことは困難な状況になっている。

そこで、本プロジェクトでは、帰国隊員の教育協力経験を生かした国際理解教育の授業の典型例を開発することにした。幸い本校の第1回ワークショップで報告をお願いした神奈川県相模原市立上溝小学校の小澤明子先生（パラグアイ派遣 平成15年1次隊 音楽）の協力を得ることが可能となったので、小澤先生の御経験を生かした授業づくりに取り組んだ。なお、本授業は2008年2月15日の本校学習公開・初等教育研修会の一環として行った。

2. 実践授業について

(1) 研究主題

帰国隊員先生の経験を生かした国際理解教育の授業は、どのように構成したらよいただろうか。

(2) 単元名

「パラグアイってどんなところ？南アメリカのことを知ろう」

(3) 研究主題について

1) 子どもたちに意識されていない南アメリカ、アフリカ、アジア

4年生になって社会科で地図帳を使った学習を始めた。毎時間地図を開き、時々話題に登場する日本の様々な土地について触れてきた。日本の様子や地名について、意識している子どもは必ずしも多くなく、学習の中で興味・関心を広げ、知識も少しずつ増えてきた。その中で世界の国や地名を扱う事もあったが、世界については日本の場合よりももっと意識にのぼっていないようであった。

そこで、本単元の学習前に、子どもに世界地図を書いて、国名を書き入れてもらうアンケートを実施したが、7大陸が描け、日本と関わりの深い国の名前を書ける

子どもは少なかった。特に南アメリカ、アフリカ、東南アジア・南アジア・西アジアについて描け、国名があげられる子どもは大変少なかった。これは何も本校児童に限った事ではないだろう。

2) 国際理解教育に、帰国隊員先生の経験は有効

これらの地域についてマスメディアで扱われる事は欧米に比して少なく、インターネットなどのメディアでも一日本語情報では一これらの地域の情報は十分でない。またその少ない中での情報には、紛争や災害などネガティブな情報も少なくない。子どもが、南アメリカ、アフリカ、東南アジア・南アジア・西アジア等について、固有の文化を知り、そのよさを感じ、尊重しようとするには極めて偏った情報しか与えられていないのではないか。

このような実態から考えると、青年海外協力隊で派遣された隊員の経験を小学校現場に持ち込む事は重要だと考えられる。青年海外協力隊の派遣先は先に挙げた地域が主となっている。日本においては得難い現地の様子や人々の姿、文化などについて十分体験してきている。また現職教員の派遣隊員は、教師としての専門性を有しているがため、子どもの視線や教材化の視点を持ちながら現地体験をしている事も見逃せない。

総合的な学習の時間が始まった際に、学校現場には様々なゲストティーチャーが招かれ、教師らとの協働によって様々な知見が学校に持ち込まれた。様々な知見が学校にもたらされる有効性の一方で、ゲストティーチャーに授業の趣旨や子どもの実態を理解してもらい協働していくためには、入念な打ち合わせが必要など、教師達はぜひぶん意を用いてきた。

ところが、現職派遣隊員は教師であるがため、学校での授業のデリケートな部分を理解し、協働が行いやすい。これは大きな利点であろう。

3) 帰国隊員先生の経験を生かした授業づくりの重点は何か。

帰国隊員先生の経験を生かし、国際理解教育の実践を行っていく際に単元構成・授業構成の重点とすべき事は以下の3点である。

- ①取り上げる国・地域と日本との関わりを位置づける。
- ②隊員の現地経験を生かした体験活動を位置づける。
- ③取り上げる国・地域のよさを十分実感させる

(4) 単元目標

- 日本と関わりのあるパラグアイの国の様子や文化を調べることを通して、南アメリカやアフリカなど、これまで知らなかった世界の国々について関心を持つとする。

※次ページカリキュラム開発の視点を参照されたい。

カリキュラム開発の視点				
	1	2	3	4
A 多文化社会	文化理解	文化交流	多文化共生	
B グローバル社会	相互依存	情報化		
C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	

※なお、本表と国際理解教育については、研究代表者 多田孝志「グローバル時代に対応した国際理解教育のカリキュラム開発に関する理論的・実証的研究」第1分冊（平成15～17年度 科学研究費補助金 基盤研究B（1） 成果報告書）を参考にした。

本単元の設計をする際に先にあげた帰国隊員先生の経験を生かした授業づくりの重点は、先の3点に即して言う以下のものである。

- ①今回取り上げるのはパラグアイである。パラグアイと日本の関わりを明らかにして行くために日系移民を取り上げることにした。パラグアイの日系移民は第2次世界大戦中である。戦争中いったん途絶えたが7000人を超え、パラグアイの人口から見ると1%に満たないマイノリティであるが、原生林を切り開いて作った耕地で大豆や小麦を栽培し、パラグアイの主要輸出農産物生産に大きな影響を与えている。授業対象となる4年生の子ども達に関心を持ちやすいように、具体的な人物が登場する資料を用意した。2007年は食糧自給率の低下が新聞紙上を賑わせたが、自給率の低下の対策を考える日本企業に協力してくれるパラグアイ日系移民の久保田さんが登場する映像資料を用意した。
- ②今回協力していただける小澤明子氏はパラグアイに派遣された経験をもっている。協力の対象は小・中学校および教員養成大学での音楽授業である。小澤氏は南米の音楽を調べ、アルパ（パラグアイハーブ）を持ち帰られ、ご自身の国際理解教育の実践の中でも用いられている。子ども達は音楽に対して強い興味を持っており、また楽器を演奏する活動は子ども達が好むものなので、南米音楽を体験することを重点に授業を構成しようと考えた。
- ③現職派遣教員が協力に赴任する国のほとんどが発展途上国である。日本との単純な比較ではその国の貧しさや後進性のみが印象に残ることも考えられる。そ

の国固有の文化の良さを体験させることによって、単純な比較では計り知れないその国の文化のよさを感じ取らせる景気をつくることのできるのです。その面でも南米の音楽のよさを十分体験させることによってパラグアイのよさを感じ取る契機が拓かれると考えた。

(5) 指導計画 (6間扱い)

第1次 イグアス農家の久保田さんが日本を救う? (1時間)

第2次 パラグアイってどんなところ? (2時間)

●本やインターネットで調べよう

●パラグアイに行っていた小澤先生をお招きしよう一本時一

第3次 パラグアイ・南アメリカについてもう少し調べよう (3時間)

●本やインターネットでパラグアイや南アメリカについて調べよう

●調べた事を新聞にまとめよう

(6) 本時の指導 (第3時)

1) 目標

パラグアイについて興味を持った事を元に、ゲストティーチャーの小澤先生のお話や南アメリカの音楽を聞いたり体験したりしながら、パラグアイや南アメリカについての興味を深めたりひろげたりする。

2) 展開 (3/6)

学習活動と内容	指導上の留意点
<p>1. ゲストティーチャーの小澤先生を紹介する</p> <p>2. 小澤先生のお話 (1) パラグアイの紹介</p> <p>①衣装について</p> <p>②場所クイズ、地球儀</p> <p>③海外青年協力隊</p> <p>④パラグアイの気候と様子(牛、のんびり)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・牛肉 ・果物 ・マテ茶 	<p>・前時、パラグアイについて調べ始めが、本やHPにもあまり情報がなかった。子どもたちは小澤先生のお話に期待している。紹介は最小限にして、活動時間を保障する。</p> <p>・一回りしてさわらせる。</p> <p>・世界地図を描き、クイズにする。地球儀 ※前時地図帳で確認しているので確認程度</p> <p>・牛と町の写真を出す。</p> <p>・グアンパ、ジェルバをみせる。</p> <p>・アサードの写真</p> <p>・旗を見せる</p>

- (2) パラグアイの子どもたちの紹介
- ①言葉が通じるか不安だったが、子どもたちは明るくて、音楽好き。
 - ②スペイン語のあいさつをしてみよう！
「オラ！ケタル？」
「ムイ ビエン！」
 - ③授業について
 - ④貧しさ（はだし、栄養不足）はあるが愛情表現が豊かなパラグアイが好き。
「ミ アモール」
「ミ コラソン」
「ドスベソ」
- (3) パラグアイ音楽の紹介
- ①アルパ・ピアノのような楽譜がない。見て覚える。
・色が付いている弦は何の音？
・ファとド

- ・子どもたちの写真
- ・2人組で練習する。

※グアラニー語について興味を持っている子どももいる。可能であれば教えてもらおう

アルパ（パラグアイハーブ）を見せる。

※子どもたちは音楽が大変好きである。

3) 本時の評価

- ゲストティーチャーの小澤先生との学習でパラグアイや南アメリカについて興味を広げたり深めたりする事ができたか。
- ※活動中の発言・表情・学習感想から見とる

(7) 授業の実際

「オラ」と明るくあいさつする小澤先生に子どもたちも元気に「オラ」と答える。小澤先生は自己紹介をして、青年海外協力隊の隊員として2年間、パラグアイで小中学生や教員志望の大学生達に音楽を教えたと話された。

自分の着ている服が、パラグアイのニヤンドゥーティ・ドレス（グアラニー語で

蜘蛛の巣の意）である事を話し、子ども達に見せた後に、手書きの世界地図と地球儀とを使ってパラグアイの位置を確認したあと、写真を使いながらパラグアイの様子を紹介した。子ども達は、牛肉を焼いたアサードという料理に関心を持った（パラグアイの人は一人あたり500gほど食べるという）。果物が豊富に食べられ、主食はマンディオカというサツマイモに似た芋だとい





アルパの曲の中にある動物の鳴き声や自然の中の音、乗り物の音をあてる活動をして、アルパの音に親しんだ。子ども達みんなにアルパをさわらせた後、「千と千尋」を弾き語りして質問の時間となった。

子ども達から出た質問は、

①なぜスペインはガラニー語とスペイン語の2つの言葉を使っているのか。(かつてスペインがパラグアイを植民地にしたから)



うことを聞くと、「ほお」と子ども達から声が漏れた。主食が芋だということに驚いたようである。

小澤先生がお世話になった家の人々の写真や、パラグアイの家の様子や人々の暮らしぶりが紹介された。服装から暑いこと、裸足でいる子ども達の姿から貧しい人から豊かな人まで様々であることが紹介された。子ども達は興味を持って小澤先生の話に聞き入った。

その後、2人1組になって、スペイン語であいさつの練習を行い、マテ茶(実物の茶のにおいを体験)とマテ茶を使ったお茶会の様子を体験した。

マテ茶の匂いをじっくりかいだ後は、子ども達がずっと興味を持っていたアルパ(パラグアイハーブ)の紹介である。アルパの音色を紹介するため「ようこそ」と題した曲を演奏し、クイズ形式で、

②日本人が例外的に移住を認められているわけはなぜか。(質問者は『ポブラディア』の解説で読んだとのこと。小澤先生はご存じなかったが、親日的な土地柄だということ話をされた)



③パラグアイには日本の県のようなものはあるのか（行政区分の有無についての質問。あるとのこと）。

④パラグアイの国の雰囲気はどのようなか（東南アジアの市場の雰囲気があると小澤先生は話されていたが。のんびりした雰囲気でも今日やれることも明日やろうというような感じがある。時間を決めても1～2時間をくれることがよくある）。

⑤パラグアイに四季の変化はあるのか（夏と冬がある）。

⑥パラグアイで食べた日本食でおいしかったものは何か（秋刀魚定食。パラグアイには日本料理店がある）。

⑦どんなお祭りがあるか（お祭りが多い国である）。

⑧小澤先生はなんでパラグアイに行こうと思ったのか（自分で行こうと思ったのではなく、パラグアイから求められていった。音楽を教えてくれる先生が必要だという援助の要請があったので行った）。





(8) 授業後の講評から (講師 京都ノートルダム女子大学 中山京子先生)

本時の授業において小澤氏は物を媒介としてパラグアイを紹介するインタープリターとして、また子ども達の学習を進める教師として十分機能したと評価された。異文化を紹介するにあたって3つのF (Fashion Food Festival) を取り上げることはよくあるが、それだけでは子ども達は表面的に関心を持つだけで終わってしまうが本時の授業には+ aの要素があった。本



時、子ども達に聞かせ体験させたアルパには南米の音楽のよさに誘う力があったように思われる。現地で生活した現職派遣隊員ならではの、また小澤先生の人間的な魅力が十分展開されていたと思われる。ただ、気をつけなければならない落とし穴も存在した。「〇〇人は〇〇だ」と第三者が断定してステレオタイプを子ども達にすり込んでしまうような点はなかっただろうか。パラグアイを紹介する写真にしても農村部のものだけであれば子ども達の印象はそれを中心に構成されてしまう。例えば首都アスンシオンの様子などを見せてはどうだったか。私たちは無自覚にコロナルな見方を教室で展開してしまうことがあるので気をつけることが必要であろう。

